

資料編

佐賀市民のスポーツに対する意識と活動の実態に関する調査集計結果

佐賀市民のスポーツに対する意識と活動の実態に関する調査 集計結果

I. 調査の目的

佐賀市スポーツ推進計画を策定するにあたり、市民の運動やスポーツに対する意識やそれらの実施状況を把握することを目的とする。

II. 調査概要

1. 調査対象者

18歳以上の男女2,000人（年代別、性別、居住地域別）

2. 調査時期

令和5年12月28日～令和6年1月19日

3. 調査方法

佐賀市住民基本台帳登録者のうち18歳以上のものを市町村合併前の市町村単位に区分し、その人口比率ごとに対象者数を算出。その対象者数に、年齢区分ごとの比率を乗じて各地区の男女別、年代別の対象者を算出した。そのうえで、住民基本台帳から対象者を無作為抽出し、郵送により調査票を送付。同封の返信用封筒により調査票の回収を行った。

4. 回収状況

送付数	2,000部		
回収数	573部（調査票：443部、Web：130部）	回収率	28.7%
有効回収数	550部（調査票：420部、Web：130部）	有効回収率	27.5%

5. 調査結果の見方

アンケート質問項目については、原則として、本市が平成30年に実施した調査（以下、「前回調査」）と同じものを設定し結果を比較できるようにした。その他本市独自の項目を追加している。

グラフや表の数値は、全体か男女別の回答者数を100とした百分率（%）で表示している。

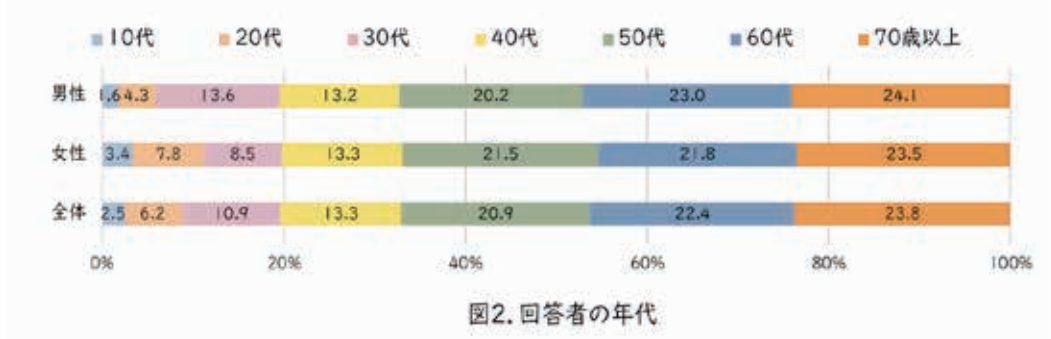
また、複数回答の場合に記載している、表中のM.T.（Multiple Total の略の略）とは、回答数の合計を対象者数で割った比率であり、比率の合計が100%を超える場合がある。

グラフや表の全体集計には性別不明の回答も含まれるため、男女別集計の合計と一致しない場合がある。また、年齢別集計で「10代」となっているのは、調査対象となる18・19歳のみの集計となっている。なお、集計は小数点以下第2位を四捨五入しているため、回答比率の合計は必ずしも100%にならない場合がある。

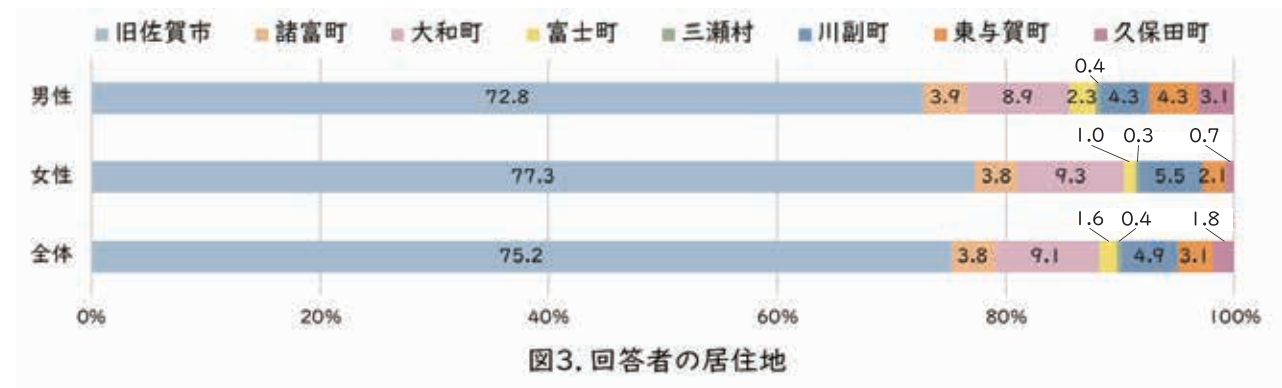
Ⅲ. 調査結果の概要

1. 回答者の基本的属性について

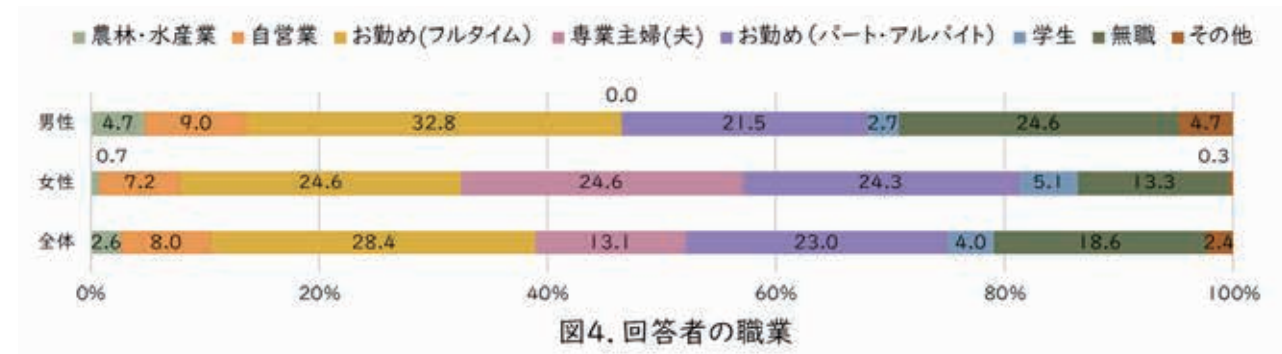
男女比については、「男性」46.7%、「女性」53.3%で女性の回答が多い（図1）。年齢では、全体で「70歳以上」が23.8%と最も多く、次に「60代」22.4%と続いており、60歳以上が5割近くを占めている（図2）。



居住地については、全体で「旧佐賀市」が男女ともに7割を超えているのに対し、「富士町」1.6%、「三瀬村」0.4%と少ない値を示しているが、概ね佐賀市における旧市町別の人口構成比と同じ比率となっている（図3）。

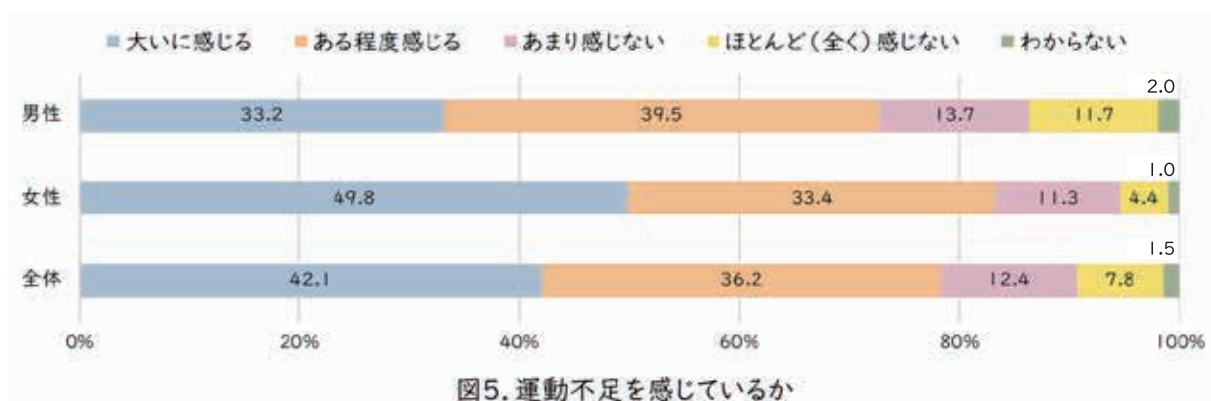


職業は、全体で「お勤め（フルタイム）」が最も多く約3割、次いで「お勤め（パート・アルバイト）」が約2割となっている。前回調査同様に両方で約半数を超える結果となったが、前回調査との比較では、前者で約1割減、後方で1割増となっている（図4）。

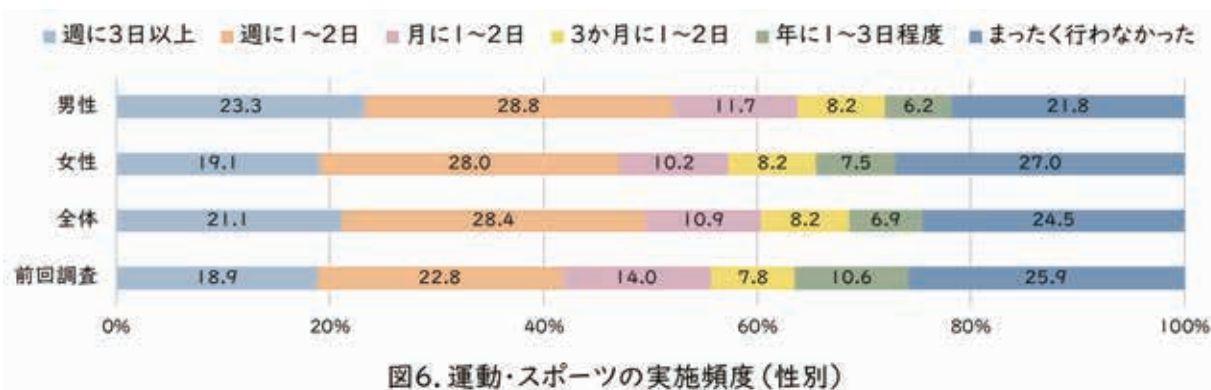


2. 「する」スポーツについて

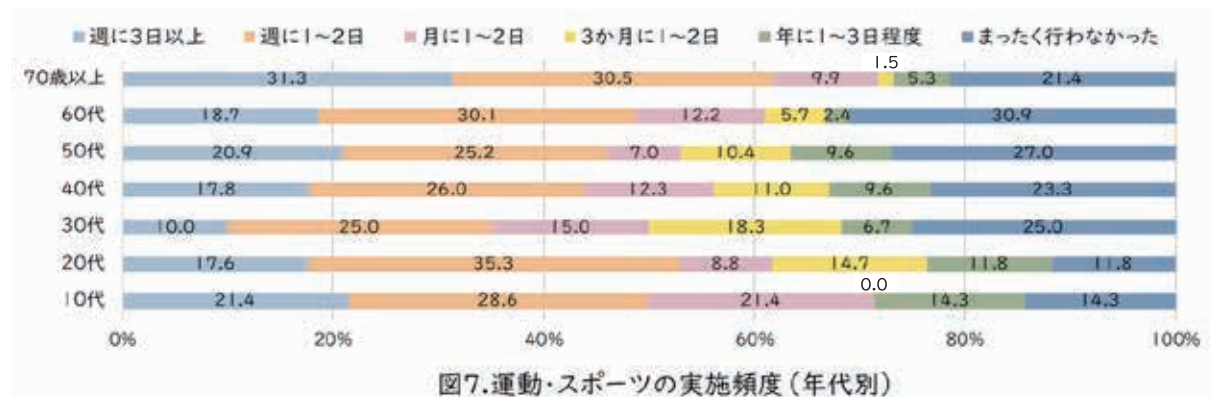
普段の運動不足感についてたずねたところ、全体で約8割が「感じる（大いに+ある程度）」と回答している。特に、「大いに感じる」を見ると、男性が約3割、女性が約5割と、女性の方がより顕著である傾向が示された（図5）。



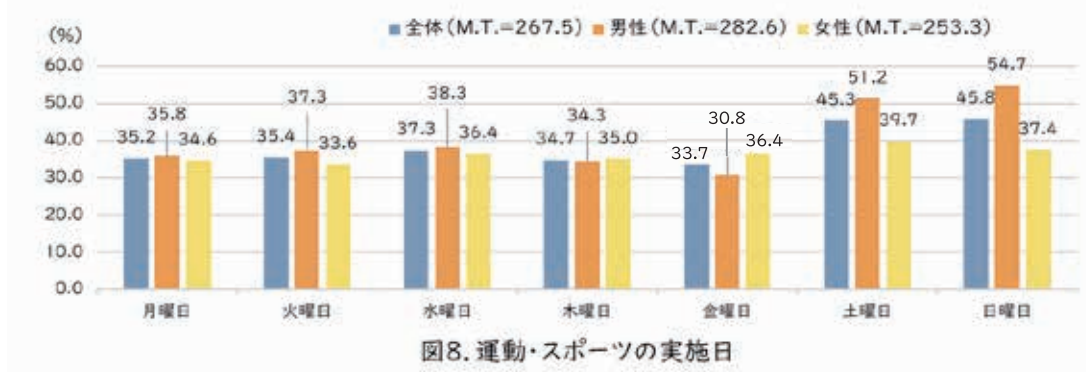
日常的(週に1日以上(週に3日以上+週に1~2日))に運動やスポーツを行っている人の割合は、全体で49.5%を示した。これは、41.7%を示した前回調査を7.8%上回る結果となった（図6）。同割合を「性別」で見ると、男性は52.1%であり、前回調査の47.0%より5.1%の増。女性は47.1%を示し、前回調査の37.2%から約1割増と大きく上回る値を示したことから、女性の実施率が顕著に上昇している。



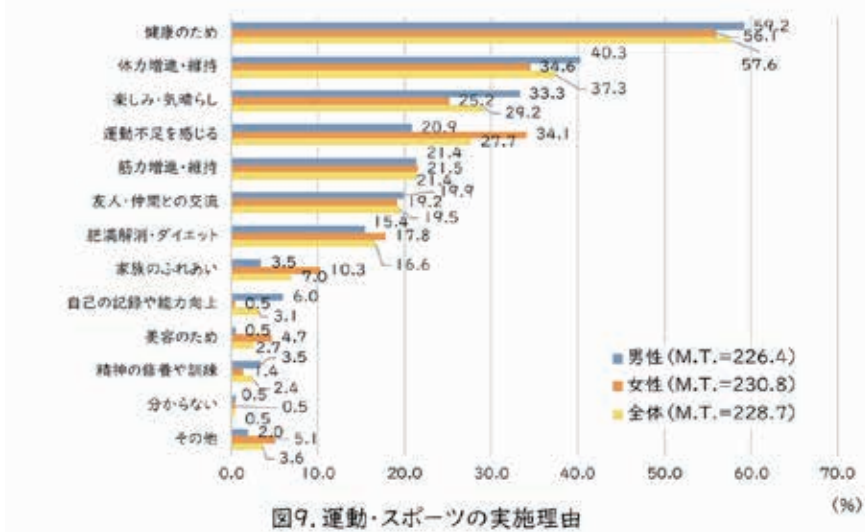
「年代別」で見ると、70歳以上の割合が61.8%と最も高く、20代の52.9%が続いている。一方、30代の35.0%が最も低い値を示し、次いで40代の43.8%となっており、30代から50代を中心とした「働き盛り世代」の実施率の低さが明らかになった（図7）。なお、実施率の全体的増加傾向が示された中で唯一60代の48.8%が前回調査の51.0%を下回る値となっている。



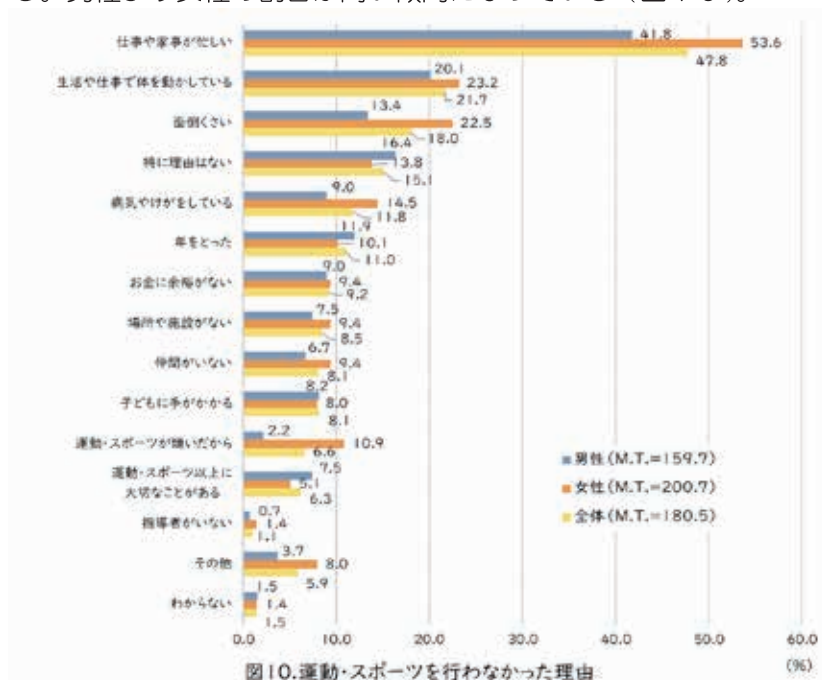
運動やスポーツの実施日(曜日)については、土・日が多く、特に男性はその傾向が高くなっている(図8)。



運動やスポーツの実施理由は、全体で高い割合を占めた項目は、順に「健康のため」(57.6%)、「体力増進・維持」(37.3%)、「楽しみ・気晴らし」(29.2%)となっている(図9)。



逆に、「週1回以上行っていない」人の理由については、全体で「仕事や家事が忙しい」(47.8%)が最も高い割合を示し、次に「生活や仕事で体を動かしている」(21.7%)、「面倒くさい」(18.0%)の順になっている。男性より女性の割合が高い傾向になっている(図10)。



過去1年間に行った運動・スポーツについては、下記の表の結果が得られた。前回調査と大きな変化はないが、「ウォーキング」の割合が男女ともに約1割高くなり、「トレーニング」も男女とも割合が高くなっている。その他では、「サイクリング」、「水泳」、「テニス・ソフトテニス」などが、多い傾向にある。

	全体	男性	(前回調査)	女性	(前回調査)
1位	ウォーキング(含、散歩・ぶらぶら歩き)(67.7)	ウォーキング(含、散歩・ぶらぶら歩き)(61.7)	ウォーキング(含、散歩)(53.4)	ウォーキング(含、散歩・ぶらぶら歩き)(73.4)	ウォーキング(含、散歩)(60.5)
2位	体操(ラジオ体操・美容体操)(18.8)	ランニング(ジョギング・マラソン・駅伝)(19.4)	ジョギング(18.6)	体操(ラジオ体操・美容体操)(26.2)	ラジオ体操(21.7)
3位	トレーニング(筋力・トレッドミル等)(18.3)	トレーニング(筋力・トレッドミル等)(18.4)	ゴルフ(17.0)	トレーニング(筋力・トレッドミル等)(18.2)	ストレッチ(18.6)
4位	ランニング(ジョギング・マラソン・駅伝)(12.8)	ゴルフ(コース)(16.9)	トレーニング・ストレッチ(11.9)	エアロビクス・ヨガ・ピラティス(11.7)	トレーニング・ストレッチ(12.8)
5位	ゴルフ(コース)(9.6)	体操(ラジオ体操・美容体操)(10.9)	サイクリング・ラジオ体操(10.7)	階段昇降(8.9)	ヨガ・ピラティス(10.9)

ニュースポーツ及び障がい者スポーツの実施経験種目についてみると、「ミニバレーボール」の割合が高くなっている。前回調査と同様に、「どれも体験したことがない」という回答が最も多い(図11)。

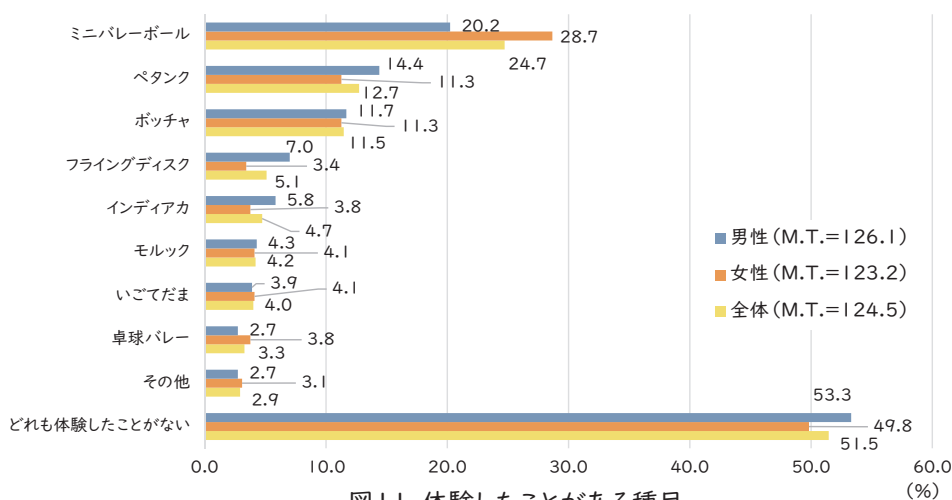


図11. 体験したことがある種目

今後、参加したいスポーツ行事について、全体では「野外活動的行事」、「レクリエーション的行事」の順に高い割合となっているが、それ以外で見ると、女性では「スポーツ教室」、男性では「スポーツ大会」の割合が高く、性別により参加希望の内容に違いが見受けられる(図12)。

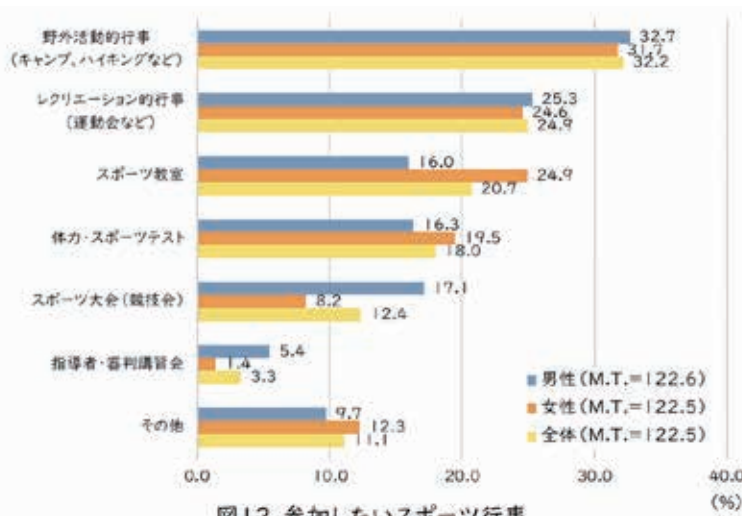
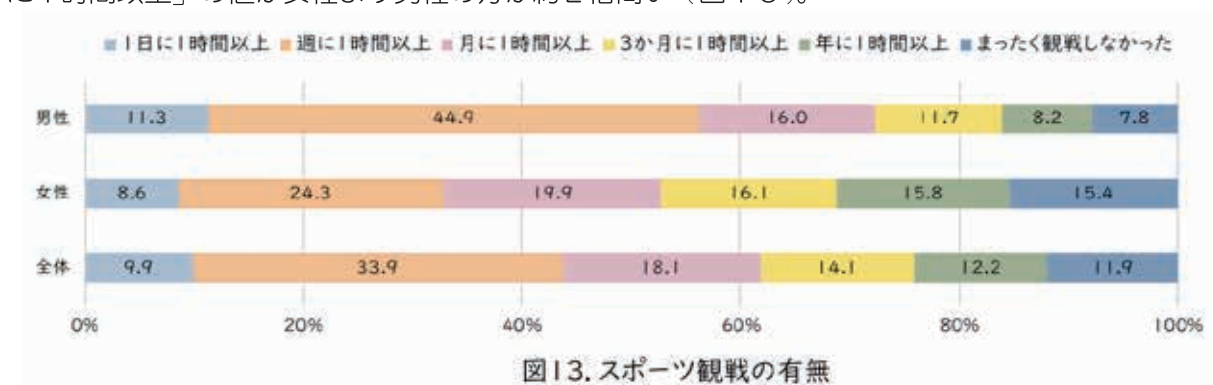


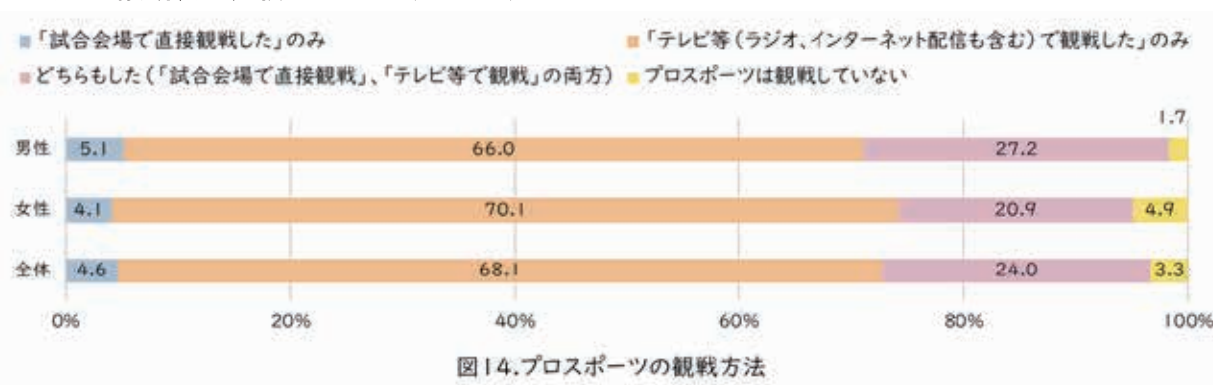
図12. 参加したいスポーツ行事

3. 「みる」スポーツについて

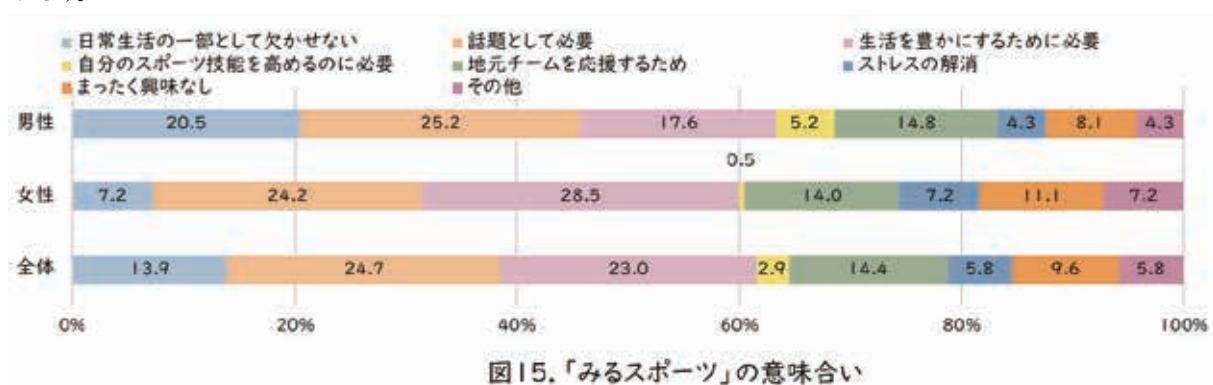
スポーツ観戦(テレビ観戦含む)の平均時間は、男性のほうが観戦時間は長い結果となった。特に、「週に1時間以上」の値が女性より男性の方が約2倍高い(図13)。



過去1年間のプロスポーツ観戦方法について見てみると、ほとんどが観戦していることが分かった。そのうち、『「試合会場で直接観戦した」のみ』は僅かであるが、「どちらもした」を含めると約3割が直接観戦を経験している(図14)。



「みるスポーツ」の意味合いとしては、全体で「話題として必要」(24.7%)、「生活を豊かにするために必要」(23.0%)の順に割合が高く、男性で「日常生活の一部として欠かせない」が高い値を示していることから、生活の中でのコミュニケーションの一部となっている様子が伺える(図15)。



プロ・代表チーム等、トップレベルのチームや選手との交流について、「ある」と回答した割合は全体で12.9%という結果である(図16)。その交流内容については、「その他」を除いて、全体では「選手などによる講演会」(26.8%)が最も高く、性別では、男性で「競技の教室」、女性では「地域イベントへのゲスト出演」がそれぞれ最高値を示している(図17)。この両者の差は、交流した理由からも見て取れる。つまり、「選手と関わりたい」は、ほぼ同等の割合だが、男性は「指導法の参考にしたい」という理由も同程度の値を示しており、女性との違いが見て取れる(図18)。

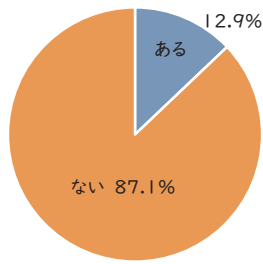


図16. トップレベルのチームや選手との交流

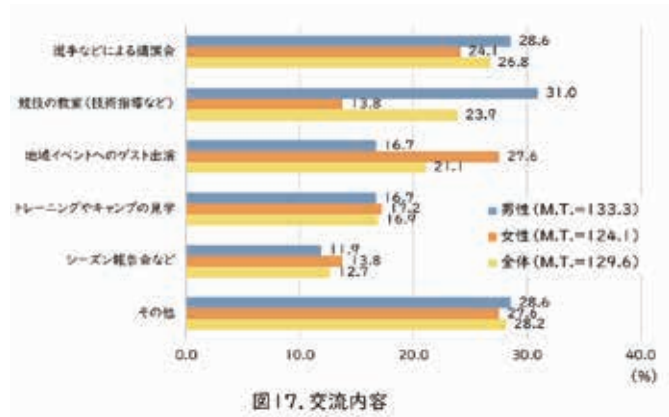


図17. 交流内容

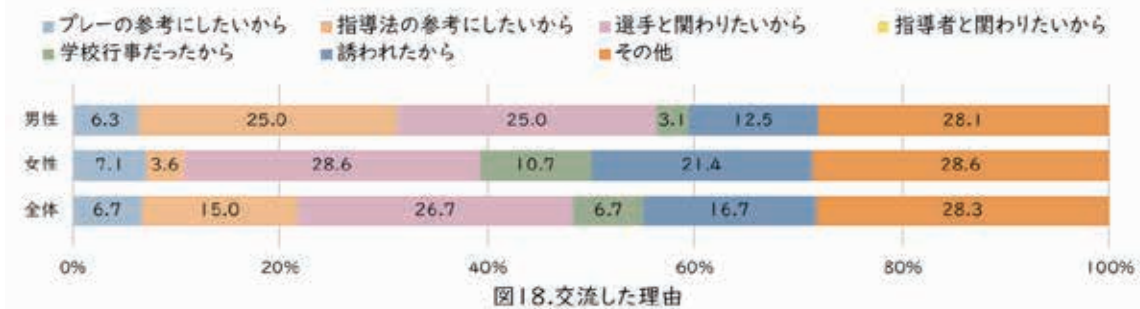


図18. 交流した理由

スポーツの合宿・キャンプ誘致については、「積極的に誘致すべき」が全体で6割を超えている（図19）。その主な理由として、「地域が活性化する」、「スポーツに関心を持つ人が増える」、「経済効果が見込まれる」の順で高い割合となっており、性別比較でも大きな差はみられなかった（図20）。なお、「誘致する必要はない」の主な理由としては、「興味がないから」「市民の施設利用が制限されるから」という回答が上位を占めている（図21）。

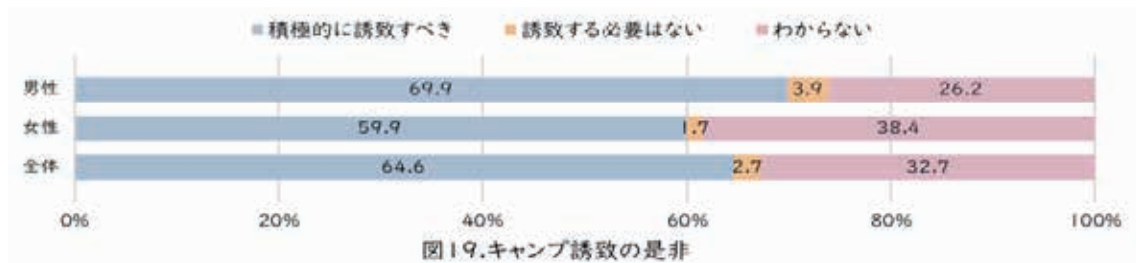


図19. キャンプ誘致の是非

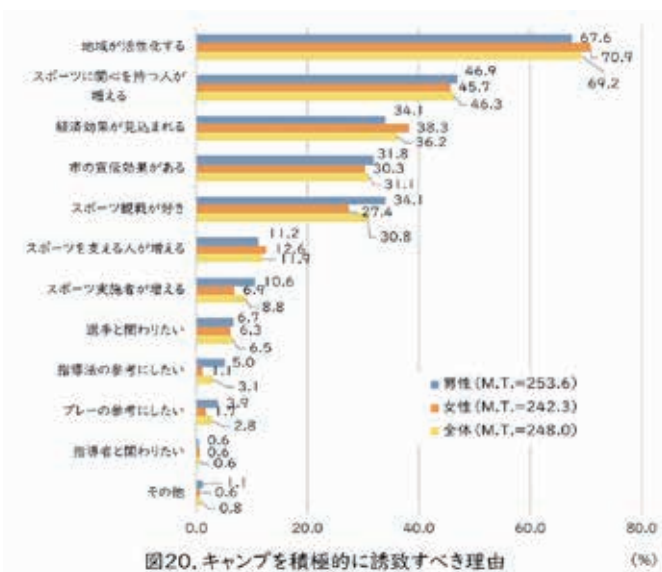


図20. キャンプを積極的に誘致すべき理由

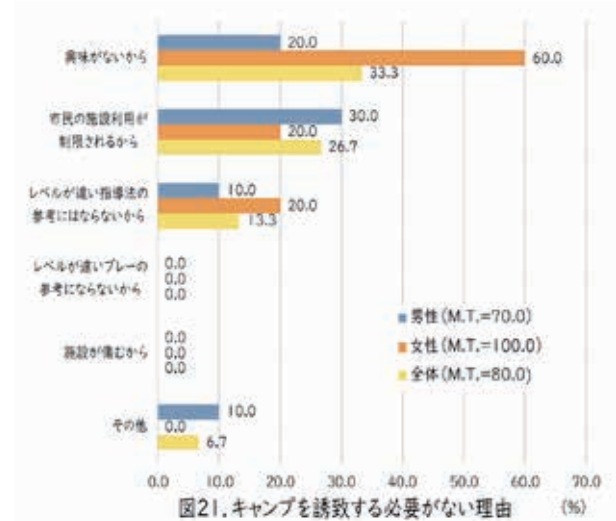


図21. キャンプを誘致する必要がない理由

4. 「支える」スポーツについて

本市スポーツボランティア登録制度の認知度については、「知っている」が全体で14.8%であった(図22)。過去1年間におけるスポーツボランティア経験をみると、参加経験が「ある」人は全体で8.6%と前回調査の11.3%を下回る値となっている(図23)。

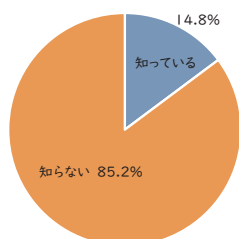


図22.スポーツボランティア登録制度の認知度

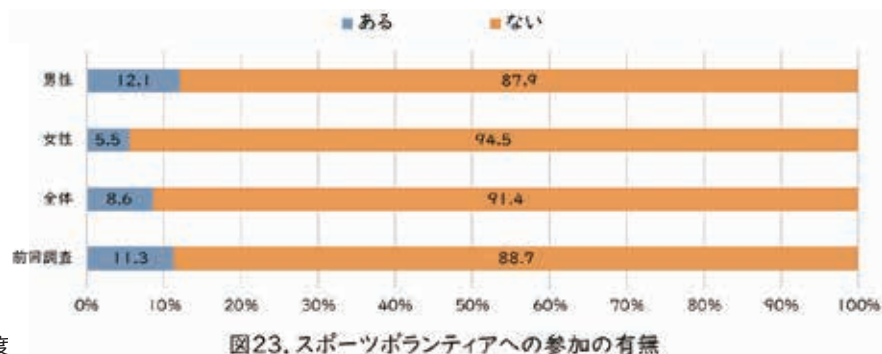


図23.スポーツボランティアへの参加の有無

参加の理由(経緯)としては、全体で「スポーツ関係団体から頼まれて」32.6%が最も高く、次に「地域や町内会で頼まれて参加した」27.9%となっており、依頼を受けての参加が上位を占めている(図24)。また、参加した人の感想は、「充実感があった」48.9%、「楽しかった」46.8%が高い割合を示している(図25)。

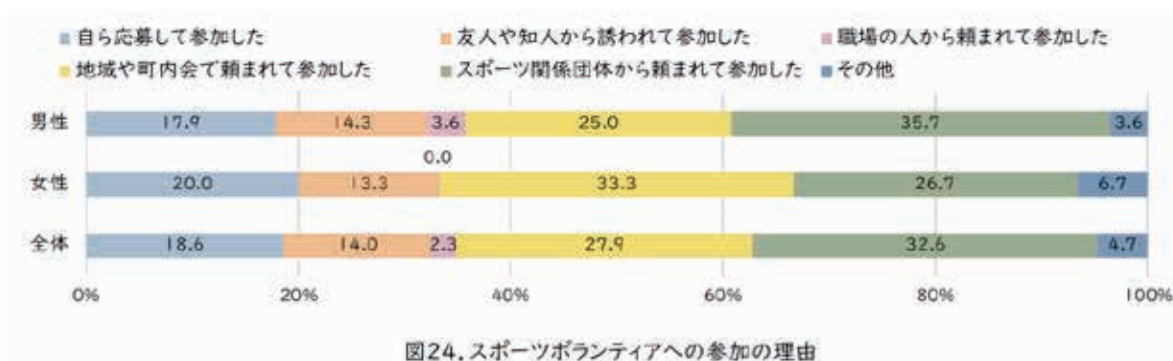


図24.スポーツボランティアへの参加の理由

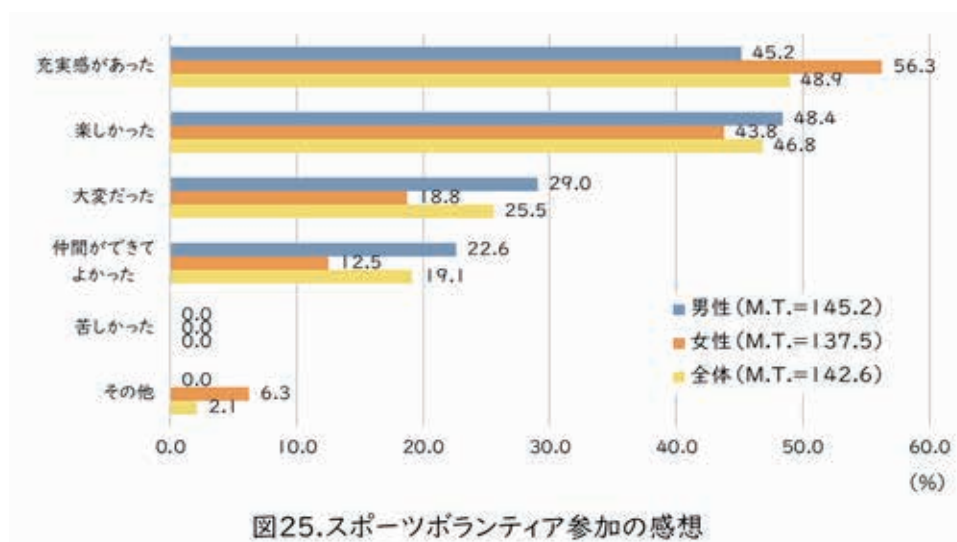
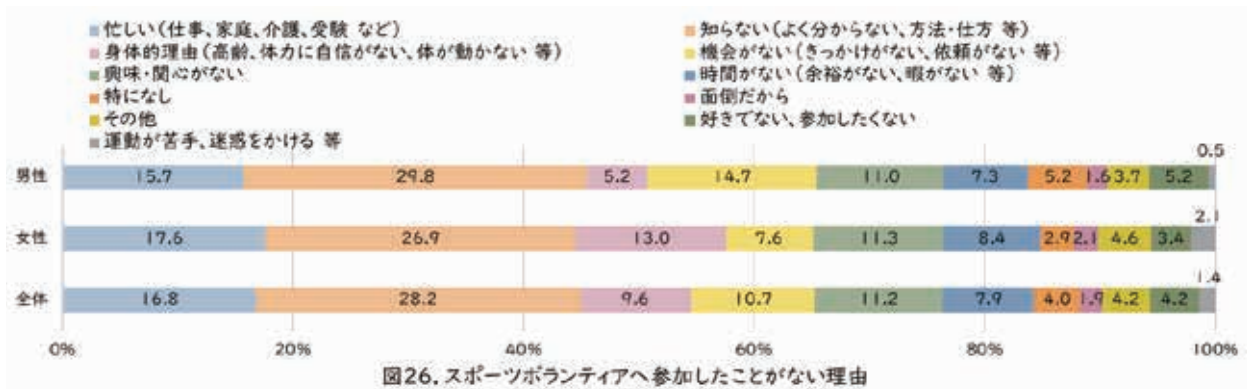
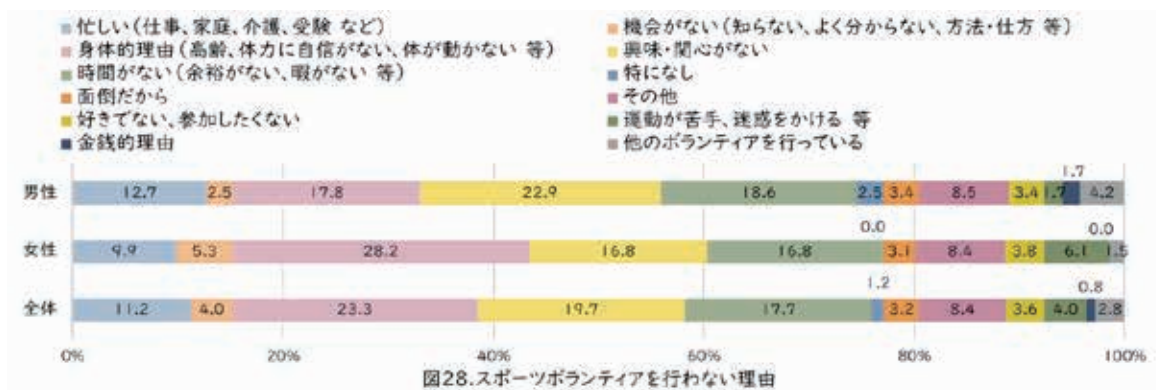
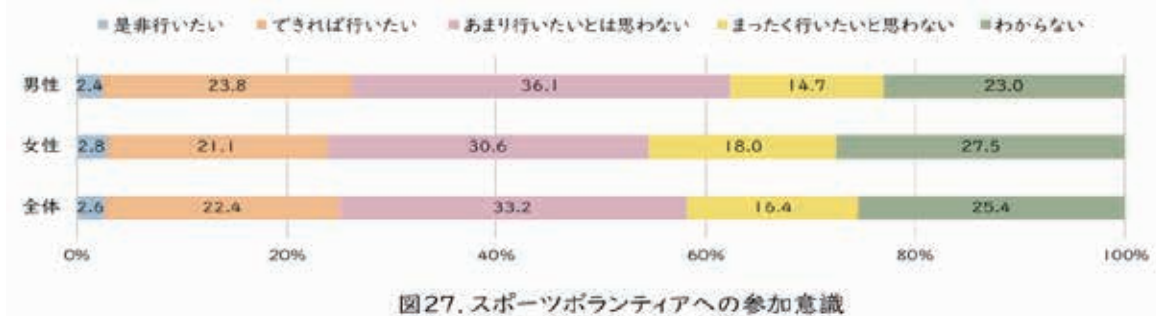


図25.スポーツボランティア参加の感想

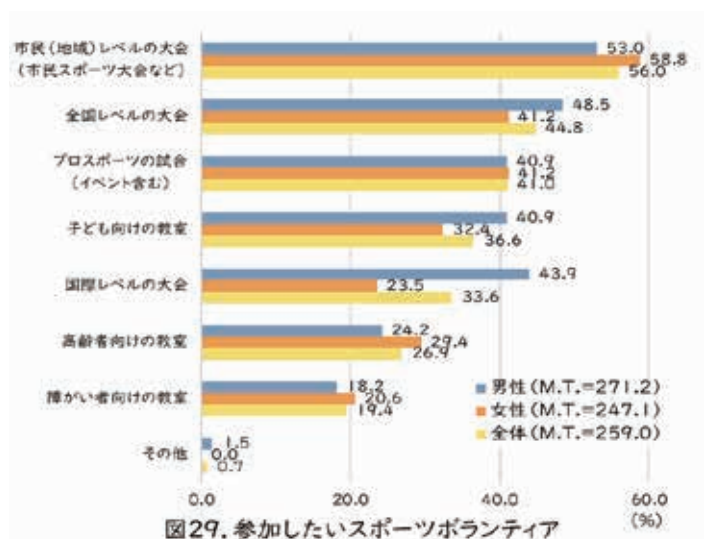
スポーツボランティアに参加したことがない人を対象に、その理由を自由記述で訊ね、回答をカテゴリー化した結果、「知らない」が28.2%と最も高い割合を示し、次に「忙しい」16.8%、「興味・関心がない」11.2%、「機会がない」10.7%が上位を占めている(図26)。



今後のスポーツボランティア活動への参加意識については、全体で「行いたい（是非行いたい＋できれば行いたい）」と回答した人が25.0%を占め、前回調査の30.0%より5.0%低下している。さらに、「行いたいと思わない（あまり行いたいとは思わない＋まったく行いたいと思わない）」が49.6%と約5割を示している（図27）、その理由については、自由記述で記入された回答をカテゴリー化した結果、全体で「身体的理由」、「興味・関心がない」、「時間がない」が上位を占めた（図28）。



一方、「行いたい」と回答した人によるボランティアの内容については、「市民（地域）レベルの大会」が最も多く、次に「全国レベルの大会」、「プロスポーツの試合」の順となっている（図29）。



5. 総合型地域スポーツクラブについて

総合型地域スポーツクラブの認知度について、「知っている」人は全体で7.7%であり、前回調査の6.5%を僅かに上回った。また、「初めて知った」は81.0%であり、前回調査時とほぼ横ばいであった（図30）。

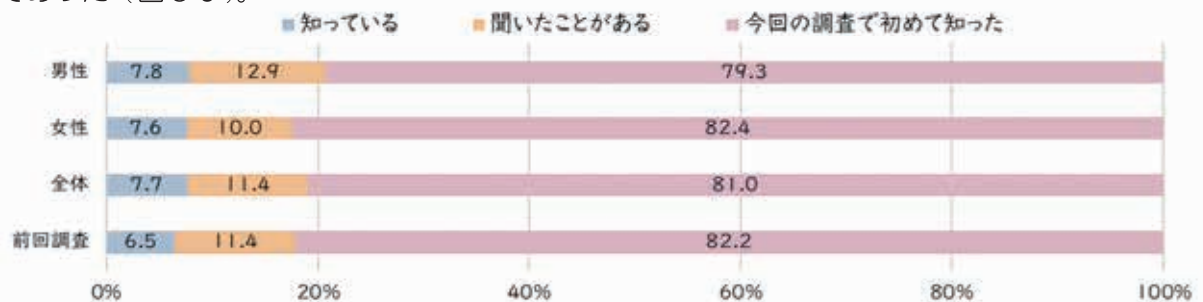


図30. 総合型地域スポーツクラブの認知度

加入意思については、全体で「(既に)加入している」が1.5%、「加入したい」が3.9%と低い（図31）。そして、約9割を占める「加入していない」及び「加入したくない」人の理由については、「時間がない」が最も高い割合を占め、「きっかけがない」、「情報が無い」、「活動内容がわからない」の3項目が同等の割合で高い値を示した（図32）。

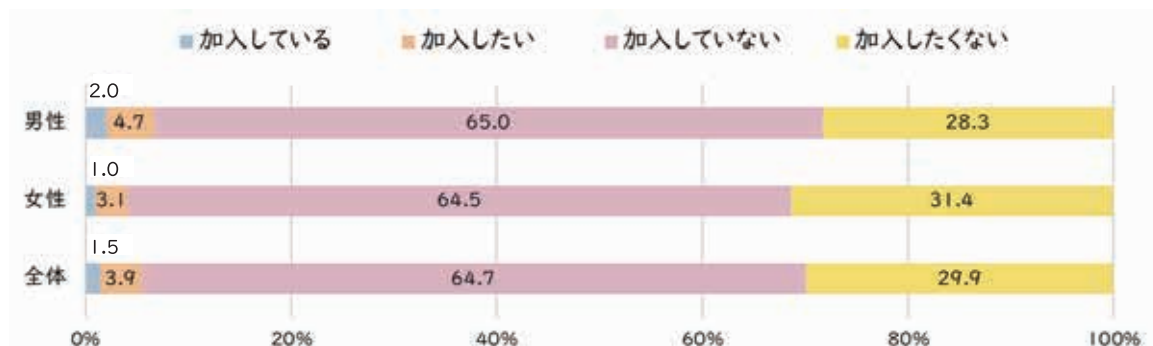


図31. 総合型地域スポーツクラブへの加入意思

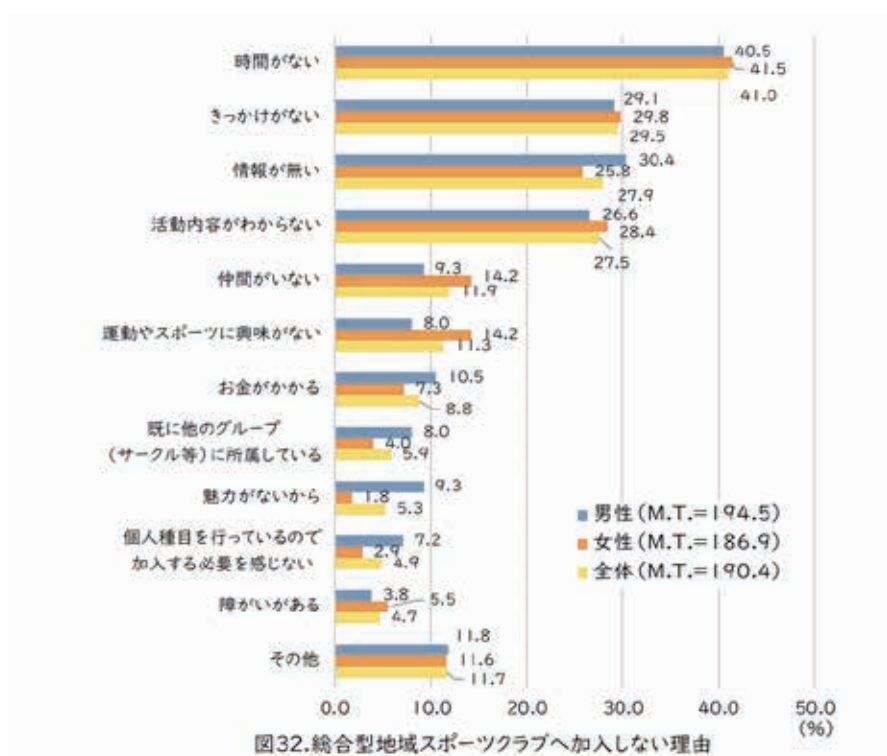


図32. 総合型地域スポーツクラブへ加入しない理由

6. 施設について

学校体育施設の利用については、「利用したことがある」もしくは「空き状況を確認したことがある」と回答した人の割合が全体で25.5%となっているが、これは前回調査の約3割を下回っている。なお、学校体育施設利用の認知度については、「知っているが利用したことがない」(42.1%)に「利用したことがある」「空き状況を確認したことがある」を含めた67.6%となっている(図33)。

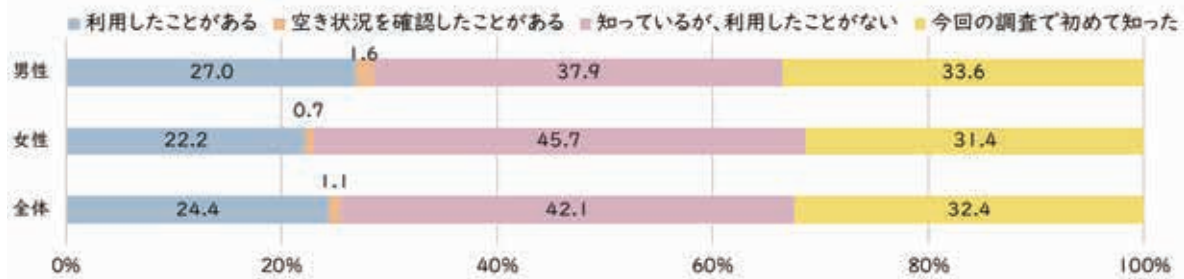


図33.学校体育施設の利用

日頃、運動・スポーツを実施する場所としては、全体では割合の高い順に、「自宅・友人宅」、「道路や空き地」、「公園・広場」となっている。男性は、「公園・広場」、女性は、「自宅・友人宅」と比較的自宅に近い場所を利用している(図34)。

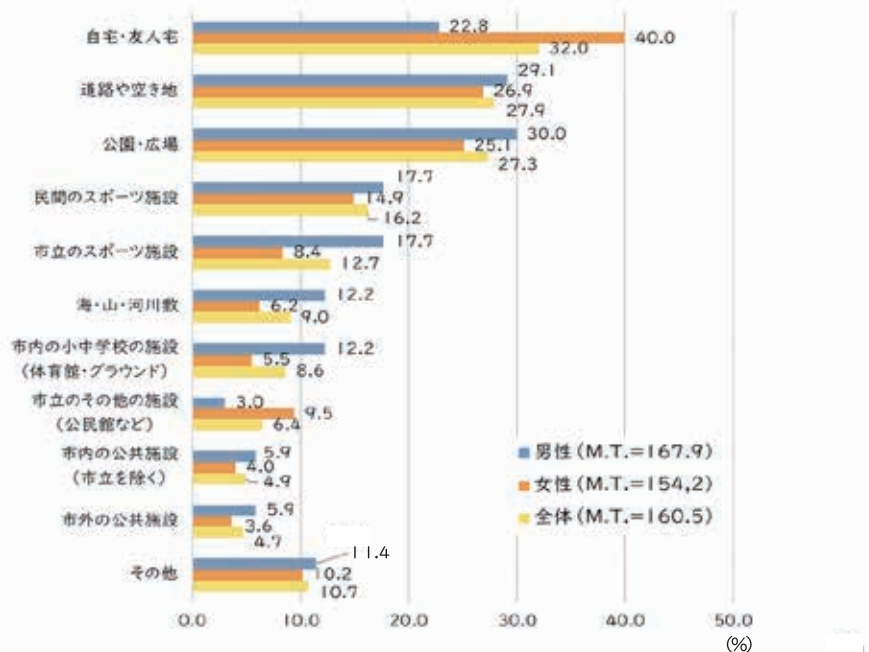


図34.運動・スポーツの実施場所

運動やスポーツを実施する時間帯については、全体では前回調査と同様に、18時以降の「夜間」と「深夜」が合わせて26.4%と多くなっている。また、「午前(9時~12時)」も多くなっている(図35)。

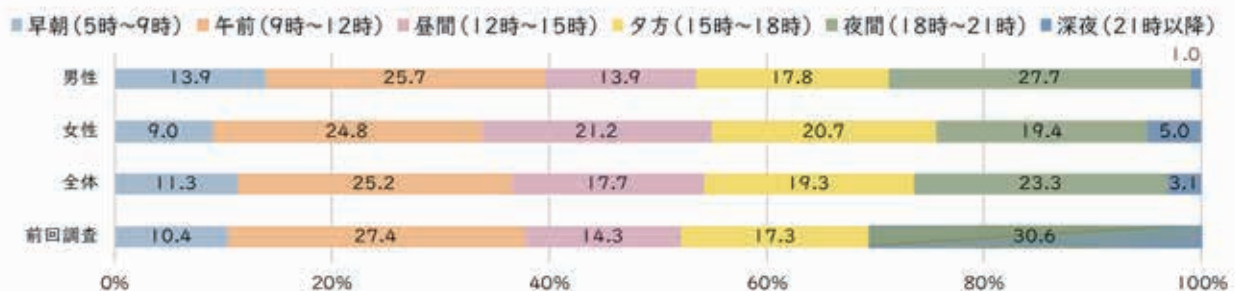
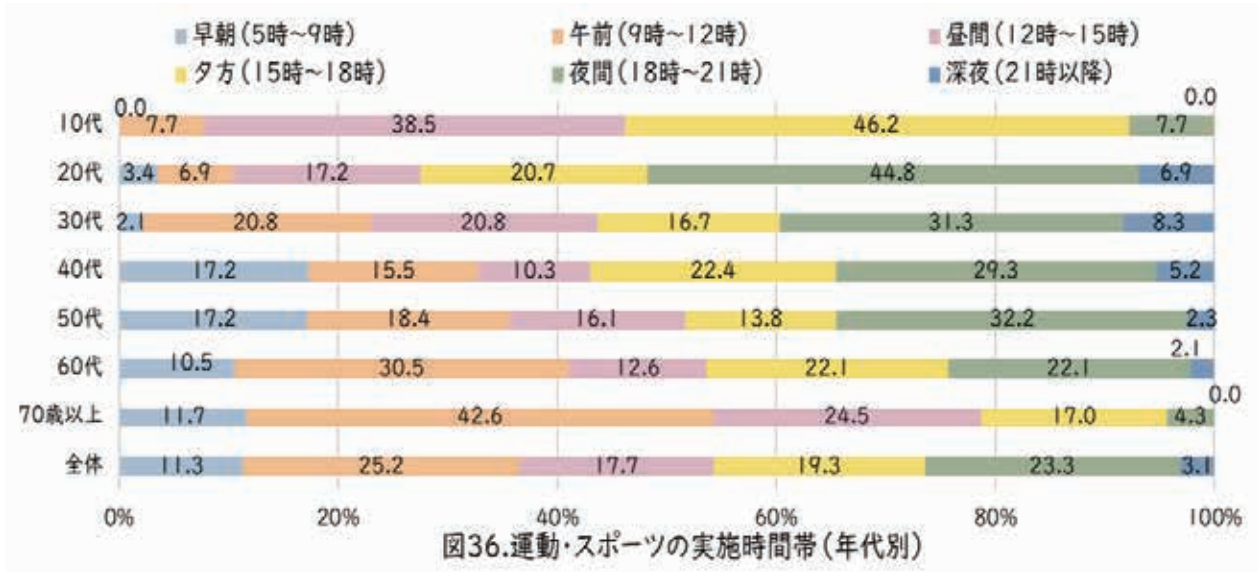
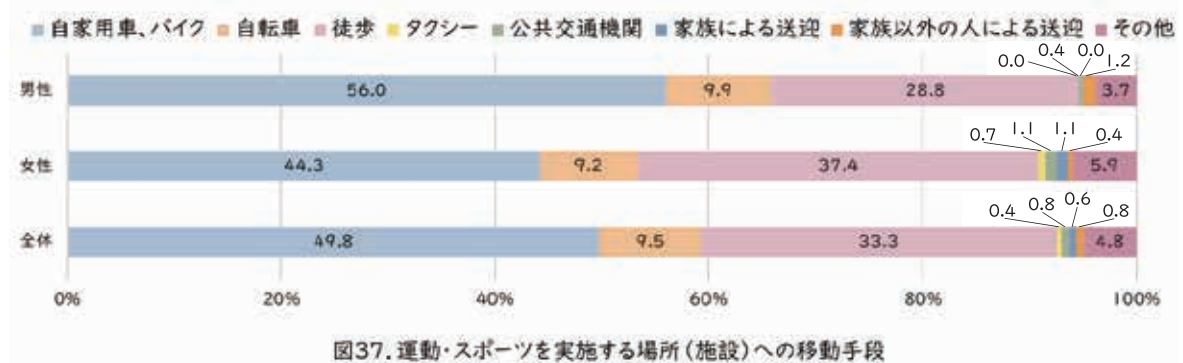


図35.運動・スポーツの実施時間帯(性別)

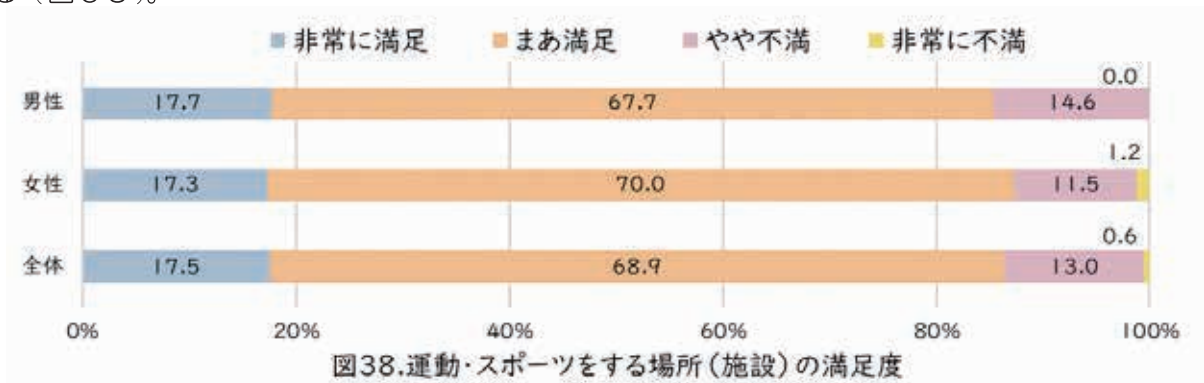
実施時間帯を年代別で見ると、10代以外の傾向として、年代が高くなれば「早朝」と「午前」の時間帯の割合が増え、逆に年代が低くなれば「夜間」以降の時間帯が増えている。また、10代から40代の半分以上は「夕方」以降に、50代以上の半分は「昼間」までに運動・スポーツを実施している（図36）。



実施場所までの移動手段は、「自家用車、バイク」の割合が多く、約半分を占めている（図37）。



普段の運動やスポーツを実施している場所に対する満足度については、8割強の人が「満足（非常に満足+まあ満足）」と回答しており、「不満（やや不満+非常に不満）」の値を大きく上回っている（図38）。



普段、運動やスポーツを行っている場所（施設）への不満は、男女とも「家から遠い」という立地に対する回答が最も多く、男性でより高い割合となっている。女性は「施設・器具」や「利用料金」に対する不満が高い（図39）。

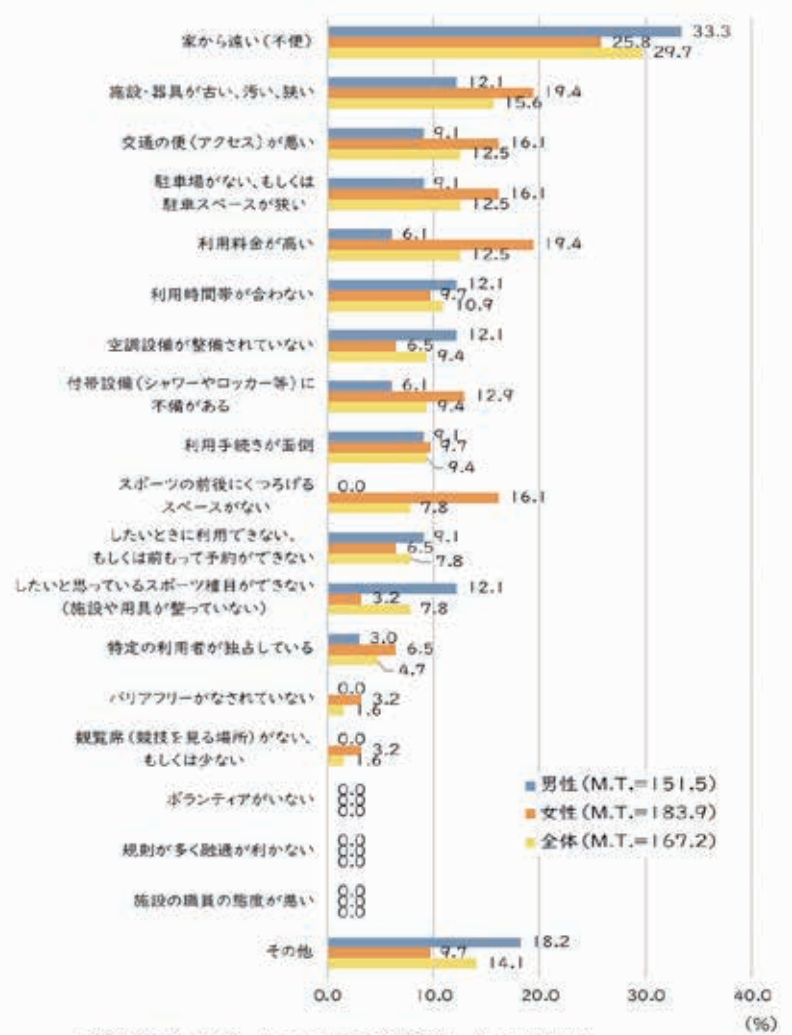


図39. 運動・スポーツをする場所(施設)への不満の理由

市立のスポーツ施設に対する要望としては、約半数が「特になし」としている。性別比較で見ると、男性は「施設の新設」や「利用料金の引き下げ」への要望が高く、女性からは「運動やスポーツ教室の充実」と「利用料金の引き下げ」への要望が高い（図40）。

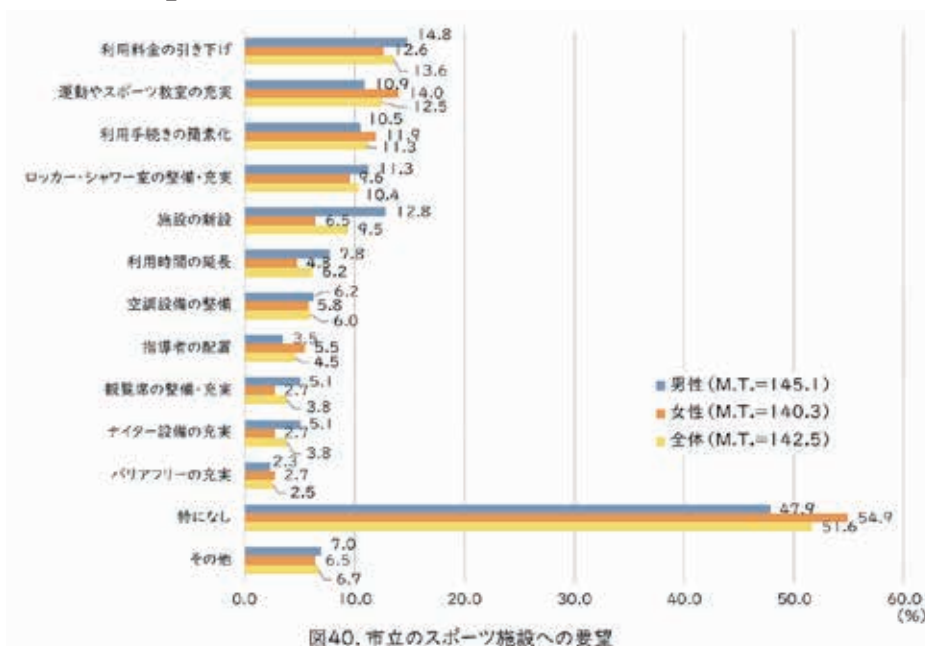
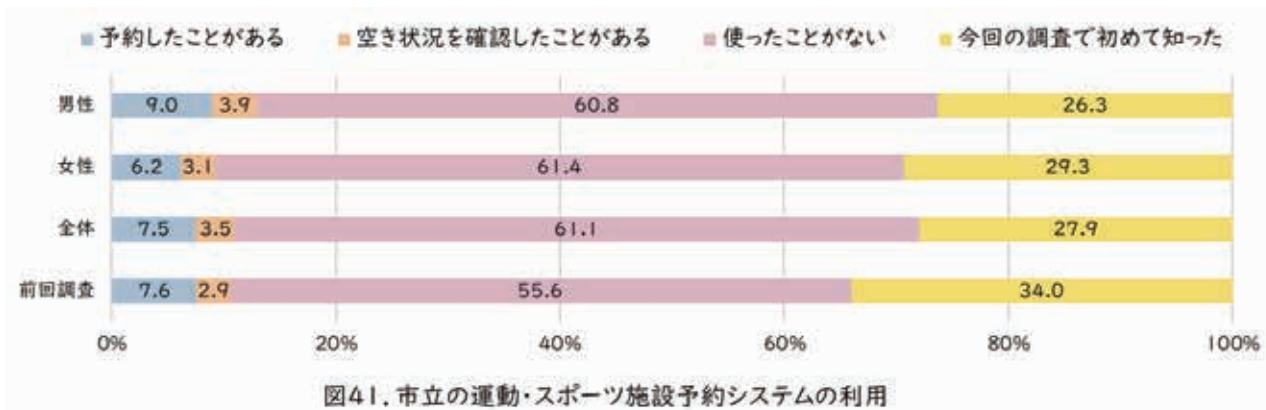


図40. 市立のスポーツ施設への要望

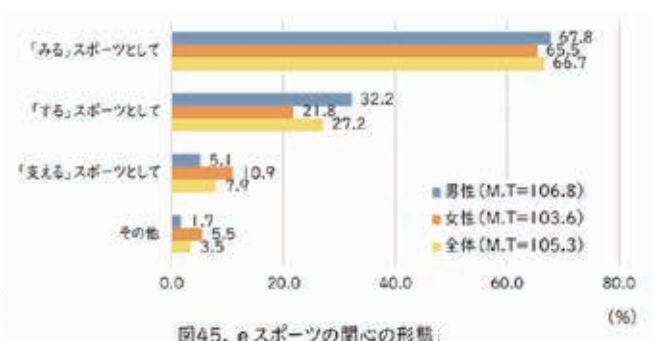
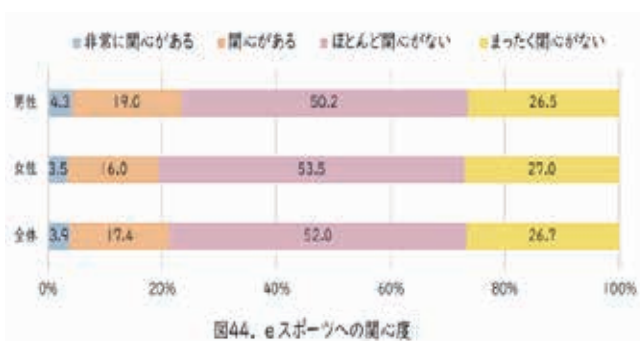
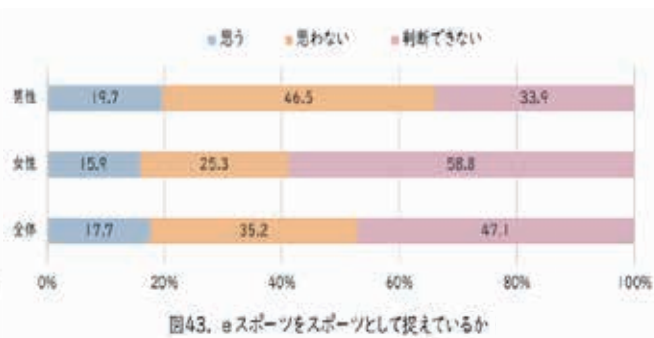
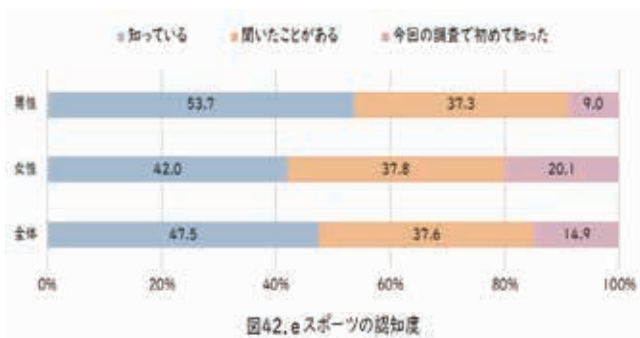
施設予約システムの利用については、「予約したことがある」と答えた人は全体で7.5%、「空き状況を確認したことがある」が3.5%となっており、前回調査とほぼ同率であった。「今回の調査で初めて知った」が27.9%、「使ったことがない」が61.1%で、前回調査と比較しても認知度が低い状況にある（図41）。



7. その他

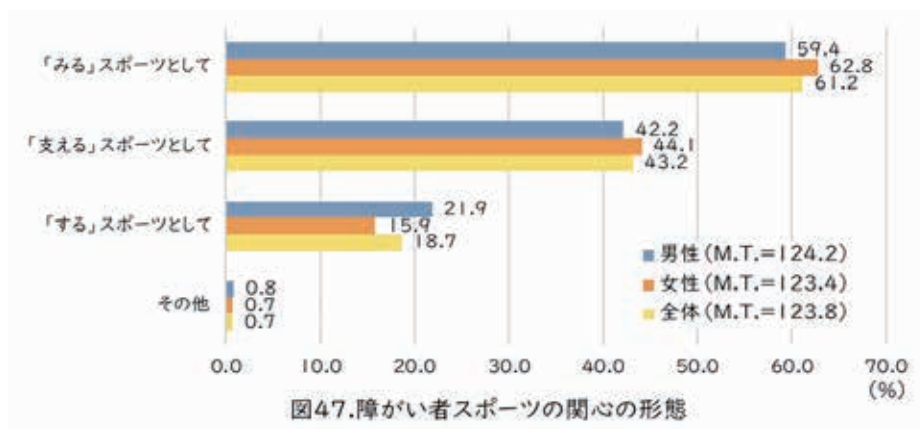
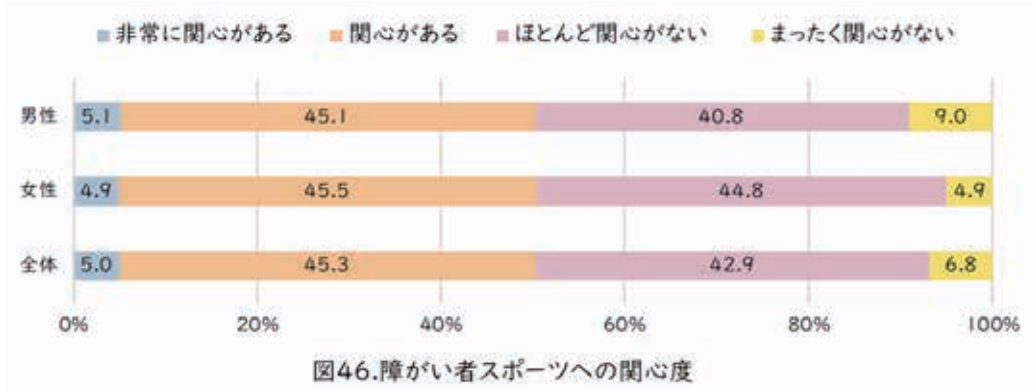
(1) eスポーツについて

デジタル時代の進展とともに注目度が高まっている「eスポーツ（エレクトロニック・スポーツ）」については、全体で約半数が「知っている」と回答している（図42）。そして、全体の17.7%がeスポーツを『スポーツ』として捉えているが、男性の方が女性より3.8%高い（図43）。関心度も男性のほうが若干高く（図44）、関心の形態については、男女ともに『「みる」スポーツとして』が最も高くなっている（図45）。



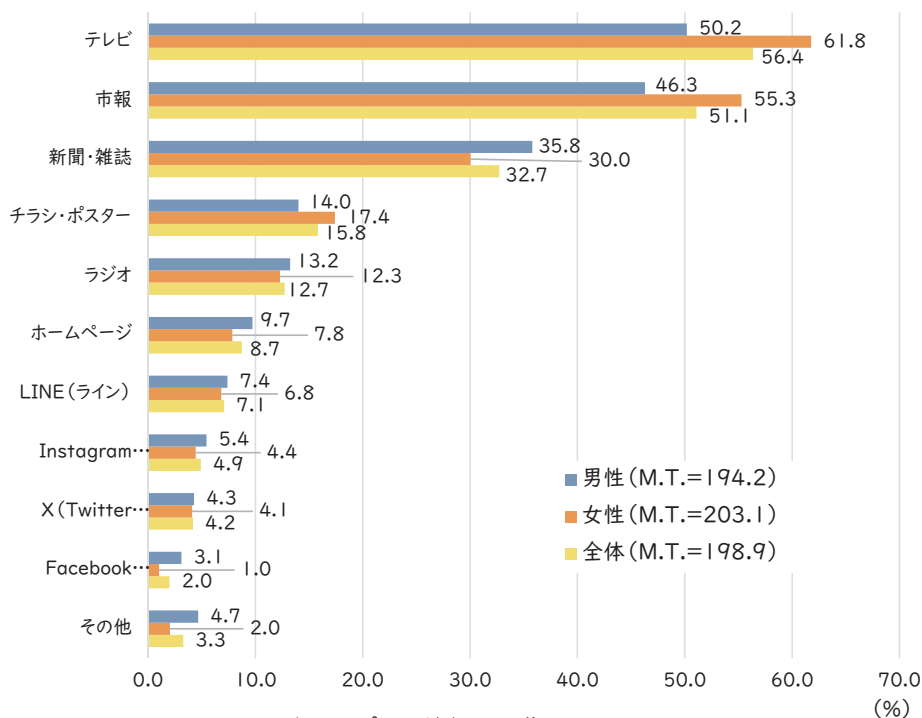
(2) 障がいのある人のスポーツについて

障がいのある人のスポーツについては、「関心がある(「非常に関心がある」を含む)」が全体で50.3%であり、前回調査の36.4%から大きく上昇している(図46)。関心の形態については、男女ともに『「みる」スポーツとして』が最も高く、前回調査から継続した傾向となっている(図47)。



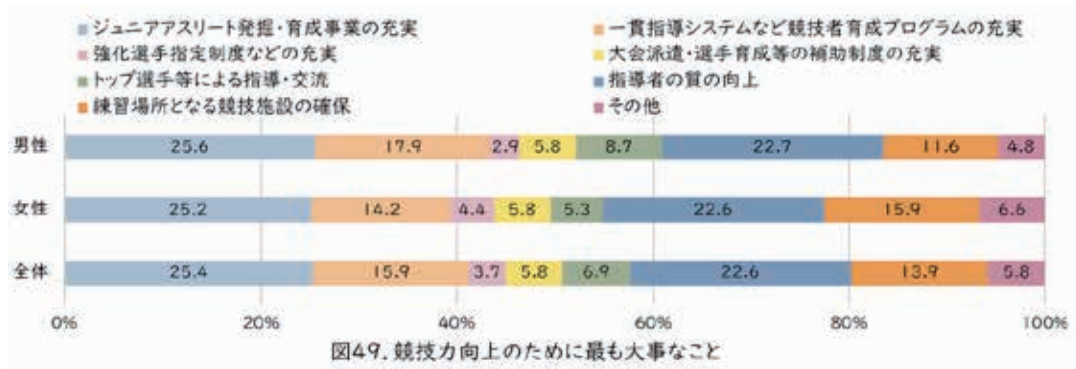
(3) 市のスポーツに関する情報の収集について

市のスポーツに関する情報収集手段として最も高い割合を示したものは全体で「テレビ」が最も多く、次いで「市報」が多い値を示し、性別比較でも同じ順位となっている(図48)。



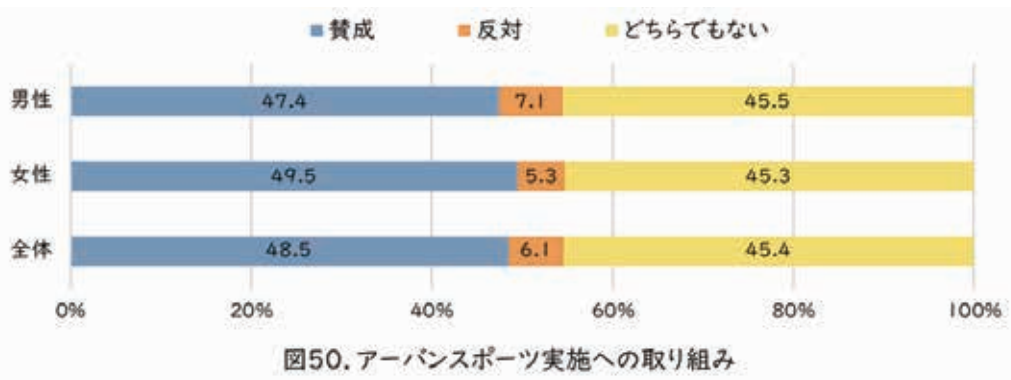
(4) スポーツ競技力向上のために重要なことについて

本市の選手・チームの競技力向上のために最も大事なことについてたずねたところ、最も選択が多かった項目は、全体と性別比較も同様に「ジュニアアスリート発掘・育成事業の充実」、次いで「指導者の質の向上」であった（図49）。



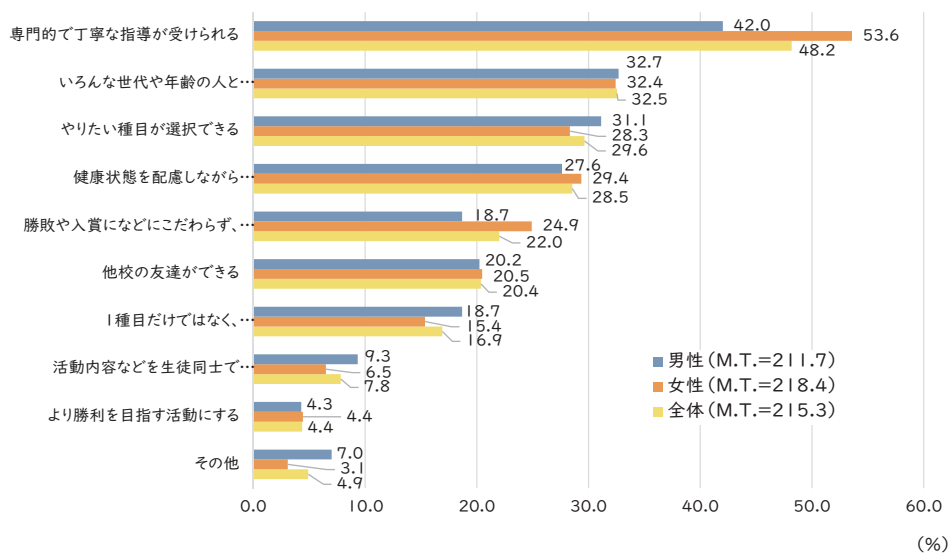
(5) アーバンスポーツ実施に向けた整備取組について

オリンピックの正式種目にも採用され、子どもや若者に人気が高い「アーバンスポーツ」に対する本市の実施場所の整備については、約半数が「賛成」を示し「反対」は僅かである（図50）。



(6) 学校運動部活動地域展開へのあり方について

国の取組の一つである「学校部活動の地域展開」に関連して、本市の運動部活動の地域展開のあり方の理想についてたずねた結果、「専門的で丁寧な指導が受けられる」48.2%、「いろんな世代や年齢の人と一緒に活動ができる」32.5%、「やりたい種目が選択できる」29.6%が上位3項目として挙げられた（図51）。



【自由意見】佐賀市のスポーツ振興についてのご意見（一部抜粋）※文面は記載のまま掲載

SAGA アリーナができ、若い人のスポーツを見る機会が多くなると思います。私は年なので体がついていきませんが楽しみです。	女性	60代
アーバンスポーツのストリート系のスポーツは“見た目（服装など）”がよろしくないイメージがあるので、厳しいルール運営が必要だと思います。（利用時の清掃、礼儀、時間厳守など）そこからイメージアップでやっていくのが良いのではないかと思います。	女性	50代
肩ひじ張らず、色々な階層、年齢にこだわらず、気楽に参加できるシステムを広めてほしい。	男性	70代
学校運動部活動は地域での活動に移行。と有りますが好きなスポーツを習いたい生徒は外のクラブに入会して学ぶ事ですネ！そこに月謝が発生し「行きたいけど、行けない子供も出てくるのではないのでしょうか？そこは疑問です。	女性	70代
国スポに向けて整備した施設を有効に活用してもらいたい。	男性	60代
子育て世代が大人も子供も一緒に楽しめる場所を作ってほしい。	女性	60代
佐賀市公式アプリにスポーツを追加してください。町内にスポーツジムがないので近隣にあれば利用したい。	女性	60代
佐賀市の取組は良いと思います。情報発信を強化して欲しい。	男性	20代
佐賀にはいろいろなスポーツのトップチームがあります。その選手たちとの交流をおこない、練習方法やメンタルトレーニングなどを色々な世代に伝えていくことで、レベルの向上につながるのではと思います。	男性	50代
佐賀バルナーズがB1に昇格してたくさんの方がアリーナに押し寄せています。経済効果、地域の活性化につながります。市も県も全体で盛り上げていけたらと思っています。	女性	70代
様々なスポーツに取り組める施設が欲しい。(例：スケートリンク)	女性	10代
施設の充実や利用料金の見直しをしてもっと市民が利用しやすくする。子供の将来を明るく活気のあるものにできるようにもっとスポーツ振興を積極的に行うべき。	男性	20代
施設や設備の充実化をしてほしいと思います。（アクセスも含む）駐車場や自転車でも行きやすいようにする等があると更に取り組む人もいるのでは？	男性	40代
指導者に依るパワハラ等を見たり、聞いたりします。今は時代が違います。いい指導者の人選をお願いします。	男性	70代
市民老若男女が気軽にスポーツに参加できるよう行政にお願いしたい。今のスポーツ行政は一部の人達のために道路、土地などをつかっている。	女性	60代
小・中・高の部活動の指導者の育成が必要。複数人の指導者が必要で、勝敗、入賞などにこだわらず、気軽に楽しめる、社会人になっても楽しめる、継続できる環境にすることを目標にする。 (バスケットコートを市街地に作るなど)	男性	40代
スポーツが苦手な方も振興に参画しやすいようにニュースポーツへの取組や様々な人、世代が気軽にチャレンジできるような雰囲気づくりをあわせて行ってほしいです。	男性	40代
スポーツ施設利用者のマナーアップを行ってほしい。	男性	60代
スポーツだけでなく、周辺を整備した方が良い。交通アクセス、宿泊、食事、そして子供への支援、スポーツ系の活動無料化。(子どもだけでいいので)	男性	30代

スポーツに関心を持ってもらう為にスポーツのみに焦点を当てるのは視野が狭い。これだけの人の興味が細分化している時代だからスポーツにプラス食・イベントなどアミューズメント感覚の入り口から間口を広くしないと、スポーツオンリーで盛り上げるのには無理がある。頭を柔らかく。	男性	30代
スポーツは社会基盤作りとして考えると重要なものだと感じています。スポーツ振興課のみなさん頑張ってください。あなた方を応援しています。	男性	50代
スポーツは好きですが、発展させるには佐賀の人口を増やすことだと思います。	女性	50代
スポーツは大切だと思う。戸外で汗を流す事皆で一つの事に心を合わせる事など協力する心を育てる	女性	70代
スポーツは地域を活性化するために、なくてはならないものだと思います。まずは「みる」ことから積極的に参加しています。	女性	40代
スポーツフェス等民間が気軽に参加できる催し事があれば良いな。フェスでは難しいなら市内の色々な催し事にブースを設ける等でも良いと思う。スポーツにふれる機会があったら良い。未経験の子供たちに体験させてあげられる機会もあれば尚良い。	女性	40代
スポーツリーダーの資格なら持っています。小・中学生のスポーツ指導者の叱って教えるような昭和指導は変えた方が良くと思う。	男性	40代
スポーツを通して市の経済発展や人口増加などの良い効果について目指す理想像を佐賀市は市民にアピールして欲しい。(もし、スポーツ振興に多額の予算を充てるなら)	男性	30代
部活動が地域に移行するという事で子供達同士の連携が失われないのか心配です。	女性	70代
小さい子どもがいるとなかなかスポーツができません。バレーナースがやっているスポーツ教室も平日しかないの、土日で子供と一緒に、または預けてできるスポーツ教室があれば良いと思います。	女性	40代
駐車場などの整備をキチンとしたうえで、安全を第一に環境づくりを進めてほしいと思います。本当に参加したい人が参加しやすいように、また、参加したいと思えるように考えて欲しいです。	女性	40代
特にこれから高齢者も増えてくるので、病院通いより町ぐるみの簡易な運動イベントが継続してやっていくと良いと思います。	女性	60代
年をとっていく私達にとって、運動はとても大事なことだと思いますが、子育てが終わったら親の介護や孫の世話など。でも、自分で時間をみつけてサークルなどに行かなくては。後はウォーキングぐらいです。ウォーキングしやすい道や場所が近くにあればと思っています。	女性	60代
普段PRを見かけないので新聞、チラシ等を利用して関心を高めていけば飛躍するのでは。	男性	70代
プロ以外の選手にもサポートが欲しい。	男性	20代
みんなを取り残さないスポーツへ。競い合いも必要。駐輪所整備。出入りしやすいように。一人スポーツ。	女性	70代
無料なら色々なスポーツに参加したいです。	女性	50代
目的をアスリートを育てるためではなし。地域のより多くの人々が楽しくスポーツを交流できる環境を整える(※提供する)ことを第一の目的にしてほしい。	男性	50代
私はスポーツ系ではありませんが、アリーナもできて佐賀のためにもスポーツでもりあげていくことをぞみます。アリーナでもいろんなアイデアで気軽にいけるところになればいいですね。	女性	60代
私もですが高齢化社会のため、高齢者が気軽に参加できるリズム体操、ストレッチ体操などで施設を利用できたら良いと思いました。	女性	50代

IV. まとめ

ここでは、Ⅲ. 調査結果の概要で述べた「する」「みる」「ささえる」スポーツの視点を中心にまとめることとする。

1. 「する」スポーツ

調査の結果、日常的（週に1日以上）に運動やスポーツを行っている人（以下、定期的実施者）の割合は全体で49.5%となった(図6)。これは、前回調査(2018年)時の41.7%を7.8%上回っている。また、前々回調査(2013年)時の45.1%より4.4%上回っていることから、この10年間のスポーツ推進計画(取組)の効果として捉えることができるが、一方で運動不足を感じている人が全体で約8割存在していることは看過できない(図5)。

実施率の年代別比較では、30代から50代「働き盛り世代」の実施率の低さが明らかになったことから、対象の状況に応じた対応策が求められる。また、まったく運動やスポーツを行わなかった人の割合が24.5%存在し、25.9%を示した前回調査から僅かな減少に留まっていることから、定期的実施者とそうでない人（以下、非定期的実施者）の二極化傾向として注視しておきたい。なお、非定期的実施者の理由を見てみると、「仕事や家事が忙しい」が全体で約5割を占め、特に女性の割合が高くなっている(図10)。他の上位理由項目を踏まえて勘案すると、身体状況や年齢、性別に縛られず、誰もがどこでも気軽にできる運動の紹介や体験機会を提供するなどの対策が必要である。

市民が参加したいスポーツ行事としては、全体で「野外活動的行事(キャンプ、ハイキングなど)」と「レクリエーション的行事(運動会など)」が高い割合を示したが、女性は「教室」型、男性は「競技会」型を好む傾向が明らかになったことから、ターゲットを絞り対象に応じた目的とプログラムの設定が重要になる(図12)。

2. 「みる」スポーツ

テレビを含めたスポーツ観戦については4割を超える人たちが「週に1時間以上」行い(図13)、プロスポーツの直接観戦は約3割が経験している(図14)。これらは、「話題として必要」や「生活を豊かにするために必要」の割合が高かったことから、日常生活におけるコミュニケーションの一部になっている様子が伺える(図15)。今後も魅力ある大会やイベントの開催の企画と同時に、地元プロスポーツの観戦を契機に継続的なスポーツへの関与を促す仕掛けづくりが求められる。

また、6割を超える人がトップチーム等の合宿・キャンプを積極的に誘致することについて賛成し(図19)、その理由として「地域の活性化」の選択率が約7割となっていることから(図20)、トップチームの観戦や交流機会を契機とした、市民のスポーツ参画をはじめ、地域振興へつなげる工夫(取組)が重要になる。

3. 「ささえる」スポーツ

過去1年間のスポーツボランティア参加については、「ある」と回答した人の割合が8.6%であり、11.3%を示した前回調査、前々回調査の値15.0%を下回る結果となった(図23)。一方、25.0%の人が今後の活動に肯定的な意識を持っていることから、まずは、この潜在的参加希望者が具体的な行動へとつなげる情報提供等が必要である。

4. その他

総合型地域スポーツクラブの認知度は、全体で7.7%であり、前回調査の6.5%から微増となった(図30)。

障がい者スポーツ(パラスポーツ)に対する関心度が前回調査から1割以上増加して5割を超えていることや(図46)、アーバンスポーツ実施への取組についても約半数が賛成し反対もわずかであることから(図50)、多様なスポーツに対する環境整備等が求められている。

そして、本市の『スポーツ競技力向上のために必要なこと』(図49)については、「ジュニアアスリート発掘・育成事業の充実」が最も多く、『学校運動部活動の地域展開へのあり方』(図51)では「専門的で丁寧な指導が受けられること」の項目が最も多くなっている。

これらと関連して、本市スポーツ振興への市民による意見の中には、SAGA2024国スポ・全障スポ大会後や地元を拠点とするプロチームとの連携を通じた「地域振興」を期待するものがある。これら市民の率直な意見を参考にしながら、本市のスポーツにおける現状と課題を整理し、今後のスポーツ推進につながる具体的な取組を行っていくことが求められている。

佐賀市民のスポーツに対する意識と活動の実態に関する調査 【障がい者対象】集計結果

I. 調査の目的

佐賀市スポーツ推進計画を策定するにあたり、障がいのある市民の運動やスポーツに対する意識やそれらの実施状況を把握することを目的とする。

II. 調査概要

1. 調査対象者

身体障害者手帳、療育手帳B及び精神障害者保健福祉手帳所持者のうち、18歳以上の男女600人

2. 調査時期

令和5年12月19日～令和6年1月19日

3. 調査方法

令和5年度の身体障害者手帳、療育手帳B及び精神障害者保健福祉手帳所持者のうち18歳以上のものを障がいの種ごとの割合に応じて対象者数を算出。年齢区分ごとに均等に男女別の対象者数を算出した600人（男女各300人）に対し、郵送により調査票を送付。同封の返信用封筒により調査票の回収を行った。

4. 回収状況

送付数	600部		
回収数	206部	回収率	34.3%
有効回収数	187部	有効回収率	31.2%

5. 調査結果の見方

アンケート質問項目については、原則として、本市が平成30年に実施した調査（以下、「前回調査」）と同じものを設定し結果を比較できるようにした。その他本市独自の項目を追加している。

グラフや表の数値は、全体か男女別の回答者数を100とした百分率（%）で表示している。

また、複数回答の場合に記載している、表中のM.T.（Multiple Total の略）とは、回答数の合計を対象者数で割った比率であり、比率の合計が100%を超える場合がある。

グラフや表の全体集計には性別不明の回答も含まれるため、男女別集計の合計と一致しない場合がある。また、年齢別集計で「10代」となっているのは、調査対象となる18・19歳のみの集計となっている。なお、集計は小数点以下第2位を四捨五入しているため、回答比率の合計は必ずしも100%にならない場合がある。

Ⅲ. 調査結果の概要

1. 回答者の基本的属性について

男女比については、「男性」50.2%、「女性」48.7%でほぼ同数（図1）。年齢では、「60代」が19.5%と最も多く、10代を除いて、ほぼ同率の割合となっている（図2）。

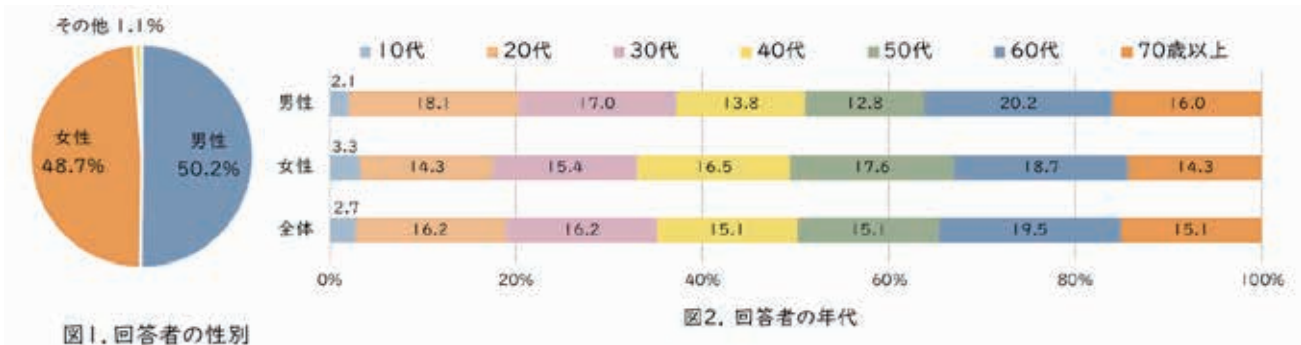


図1. 回答者の性別

図2. 回答者の年代

居住地については、全体で「旧佐賀市」が約7割となっている。次に「大和町」10.8%、「川副町」7.6%と続いている（図3）。



図3. 回答者の居住地

回答者の職業は、「無職」が最も多く全体で約3割となっている。次いで「お勤め（パート・アルバイト）」22.3%、「お勤め（フルタイム）」15.8%が多い（図4）。

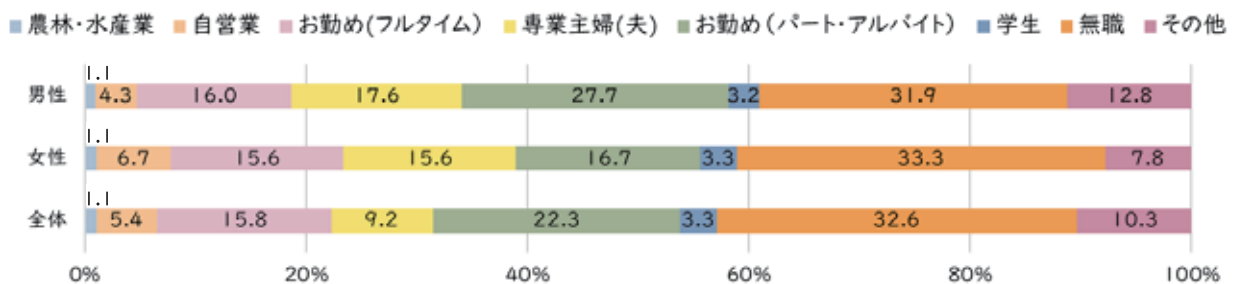


図4. 回答者の職業

回答者の障がいの種別は、「肢体不自由」が最も多く約4割、次いで「内部障がい」が約3割となっており（図5）、障がいの程度は「一人で動ける」が最も多く、約5割を占めていた（図6）。

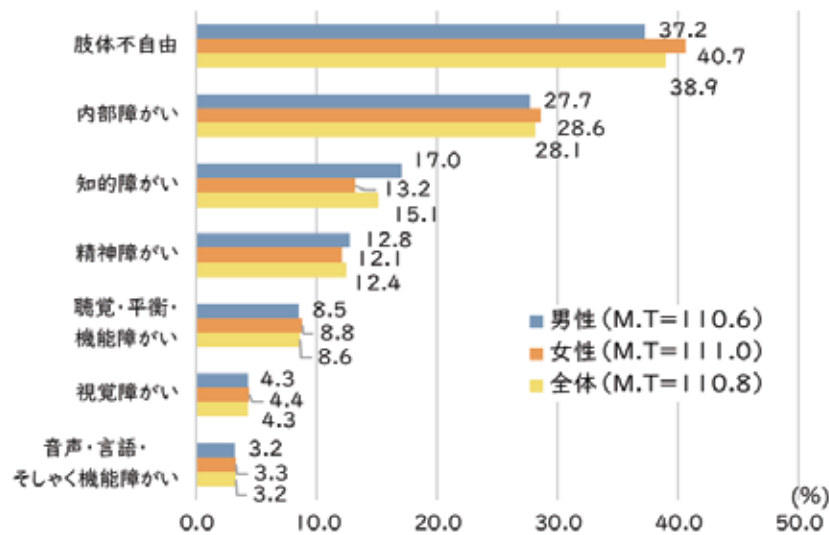


図5. 障がいの種別

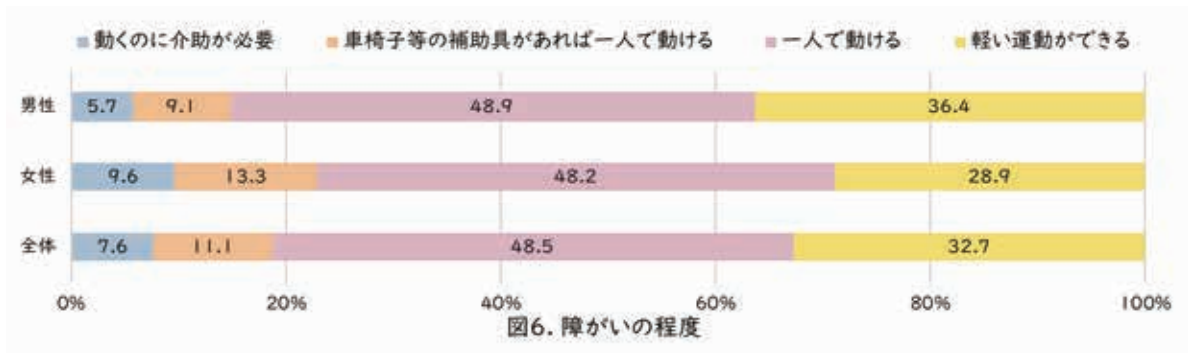


図6. 障がいの程度

2. 「する」スポーツについて

普段の運動不足感についてたずねたところ、全体で75.9%が「感じる（大いに感じる+ある程度感じる）」と回答した。特に、「大いに感じる」を見ると、男性が約3割に対して女性が約5割と、女性の方がより顕著である傾向が示された（図7）。

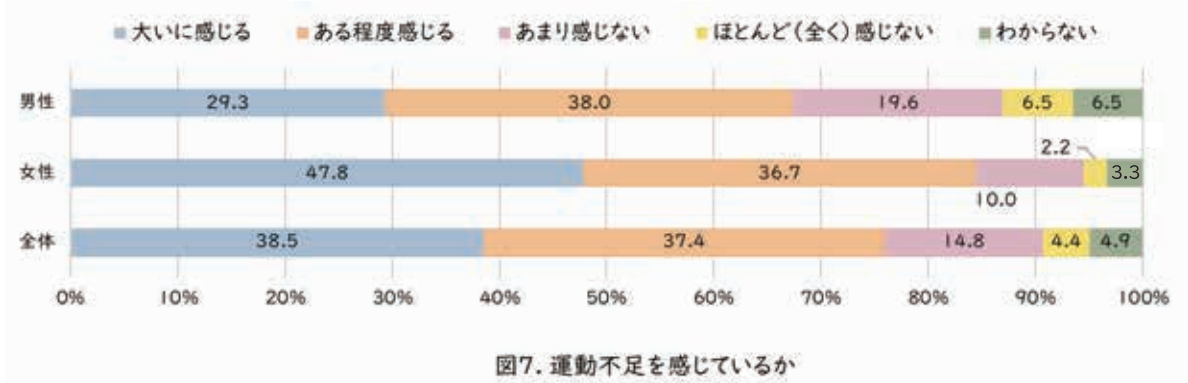


図7. 運動不足を感じているか

運動・スポーツの実施頻度を見ると、「週に1日以上（週に3日以上+週に1～2日）」実施している人（定期的実施者）は、全体で41.9%を示し、前回調査から2.6%の増である。性別比較では、男性は42.0%、女性は41.8%とほぼ同等となった。しかし、「まったく行わなかった」が全体で40.8%と前回調査とほとんど変わっていない（図8）。年代比較で見ると、「70歳以上」の割合が5割と最も高く、年代が下がると割合も低下する傾向がみられるが、「40代」の定期的実施者が最も低い。また、「20代」の約5割が「まったく行わなかった」と回答している（図9）。

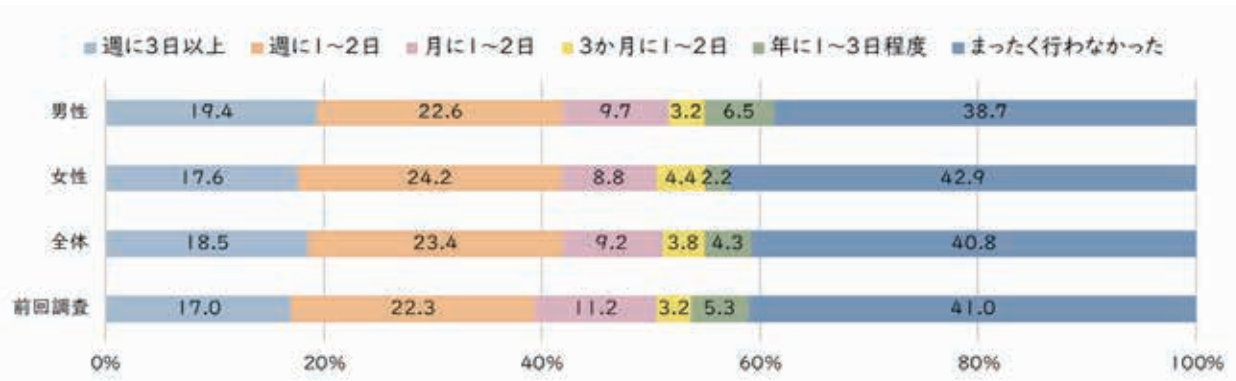


図8. 運動・スポーツの実施頻度(性別)

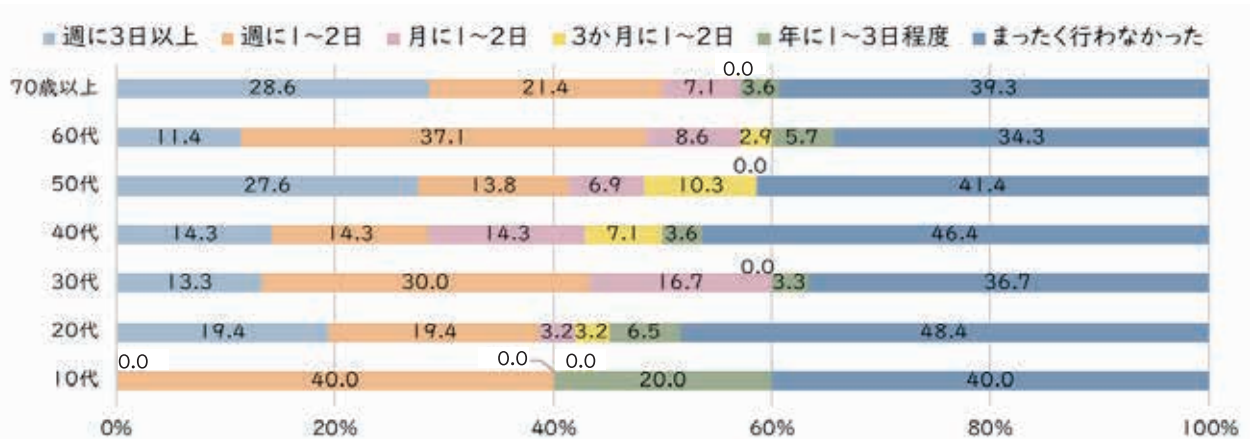


図9. 運動・スポーツの実施頻度(年代別)

運動やスポーツの実施日については、「男性」は週末、「女性」は平日の割合が高い傾向を示している(図10)。

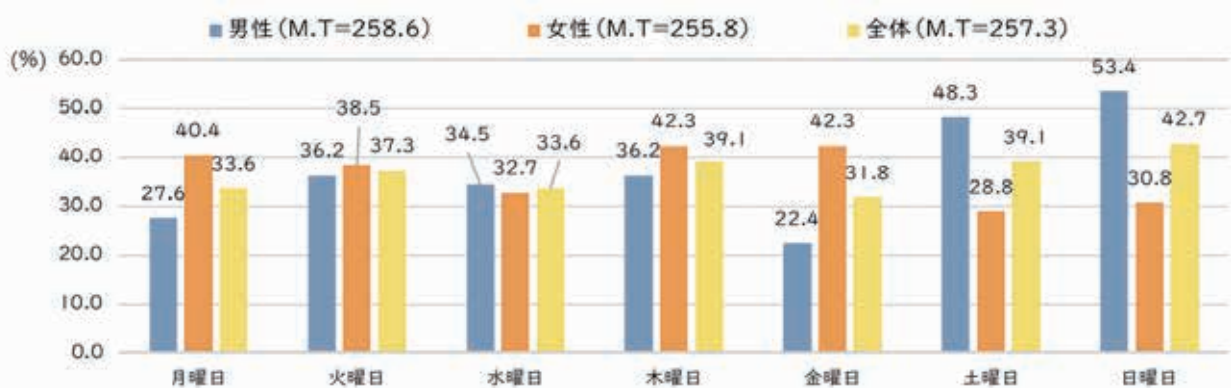


図10. 運動・スポーツの実施日

運動やスポーツを行う目的について見てみると、全体の上位3項目は、「健康のため」58.2%、「体力増進・維持」42.7%、「楽しみ・気晴らし」34.5%となっている(図11)。

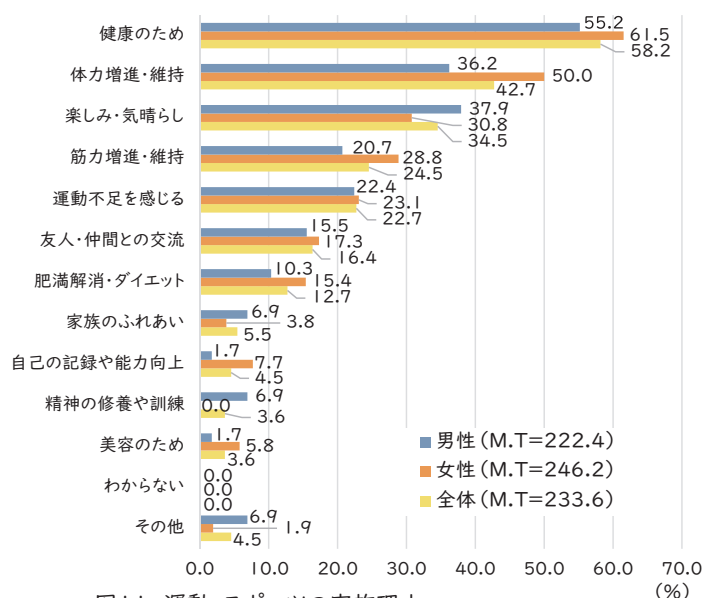


図11. 運動・スポーツの実施理由

過去1年間に行った運動・スポーツについては、下記の表の結果が得られた。「トレーニング」が男女ともに割合を増やし順位が上がっている。また、「階段昇降」が新たな項目として設定され上位にあがっている。

全体	男性	(前回調査)	女性	(前回調査)
1位 ウォーキング(含、散歩・ぶらぶら歩き)(64.5)	ウォーキング(含、散歩・ぶらぶら歩き)(56.9)	ウォーキング(含、散歩)(59.6)	ウォーキング(含、散歩・ぶらぶら歩き)(73.1)	ウォーキング(含、散歩)(50.9)
2位 体操(ラジオ体操・美容体操)(23.6)	トレーニング(筋力・トレッドミル等)(20.7)	ラジオ体操(21.1)	体操(ラジオ体操・美容体操)(30.8)	ラジオ体操(28.3)
3位 トレーニング(筋力・トレッドミル等)(18.2)	体操(ラジオ体操・美容体操)(17.2)	サイクリング(14.0)	トレーニング(筋力・トレッドミル等)(15.4)	ストレッチ(20.8)
4位 階段昇降(13.6)	階段昇降(15.5)	ボウリング(12.3)	階段昇降、水泳(11.5)	トレーニング(13.2)
5位 障がい者スポーツ(バラスポーツ)(10.0)	障がい者スポーツ(バラスポーツ)(13.8)	トレーニング・ストレッチ(10.5)	—	水泳(11.3)

運動やスポーツを「週1回以上していない」理由は、全体で「病气やけがをしている」25.9%、「面倒くさい」20.4%、「特に理由はない」16.7%の順で、割合が高くなっている(図12)。

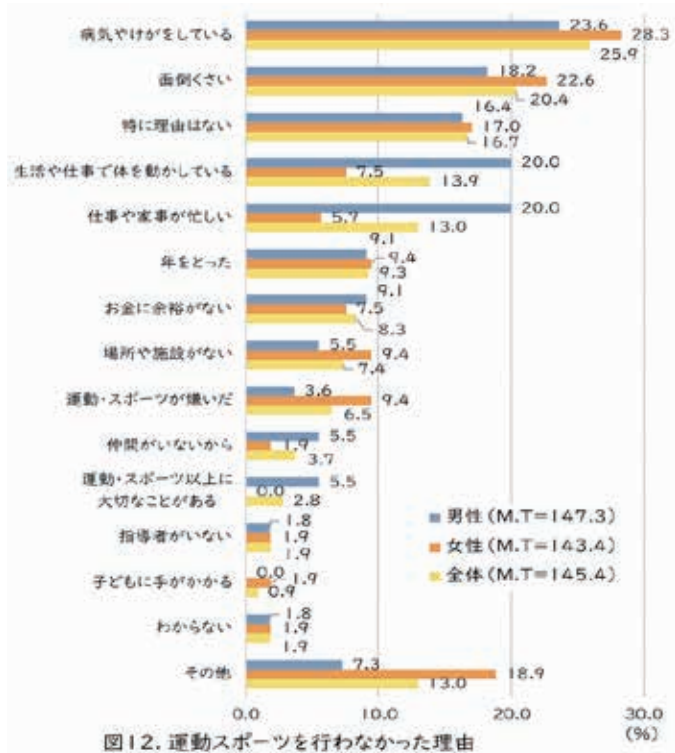


図12. 運動スポーツを行わなかった理由

ニュースポーツ及び障がい者スポーツの実施体験種目についてみると、「どれも体験したことがない」という回答が最も多く、約6割を占めた。実施種目で最も多い割合を示したものは、「ボッチャ」の15.7%となっている（図13）。

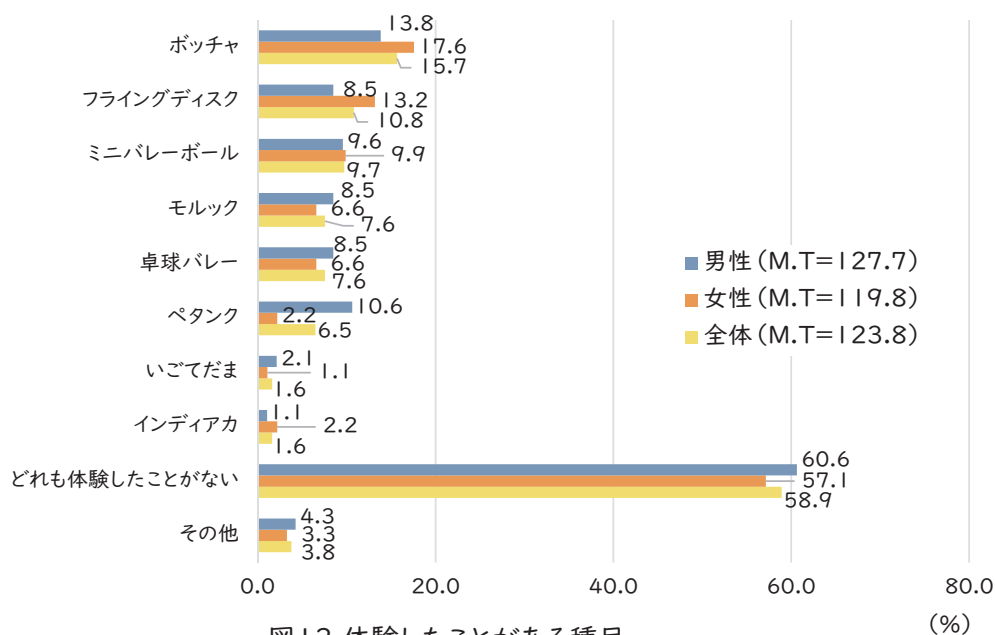


図13.体験したことがある種目

今後、参加したいスポーツ行事について、女性は、「スポーツ教室」が最も多く、男性は、「レクリエーション的行事」という回答が最も多く、前回調査と同様の結果となった（図14）。

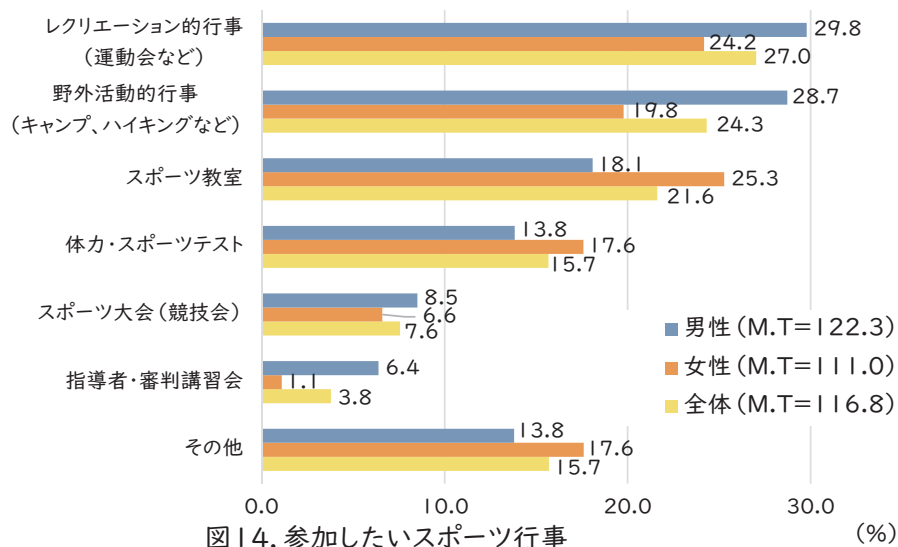
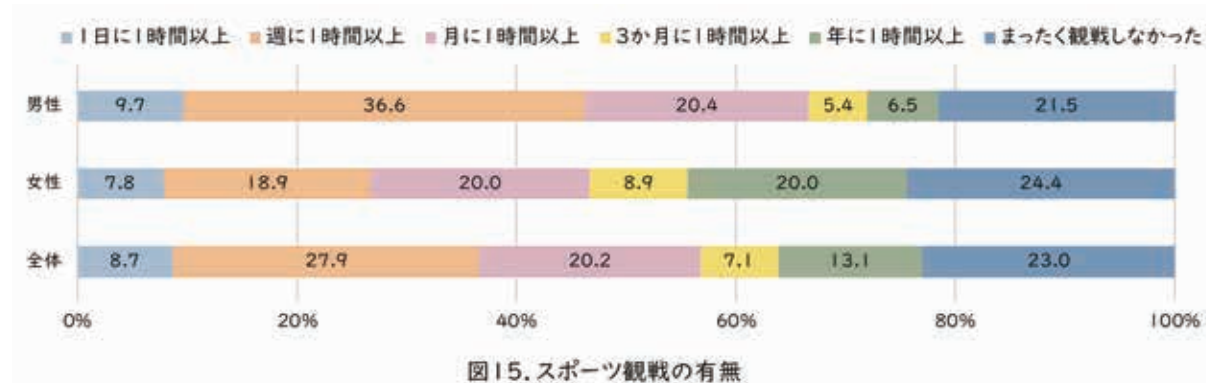


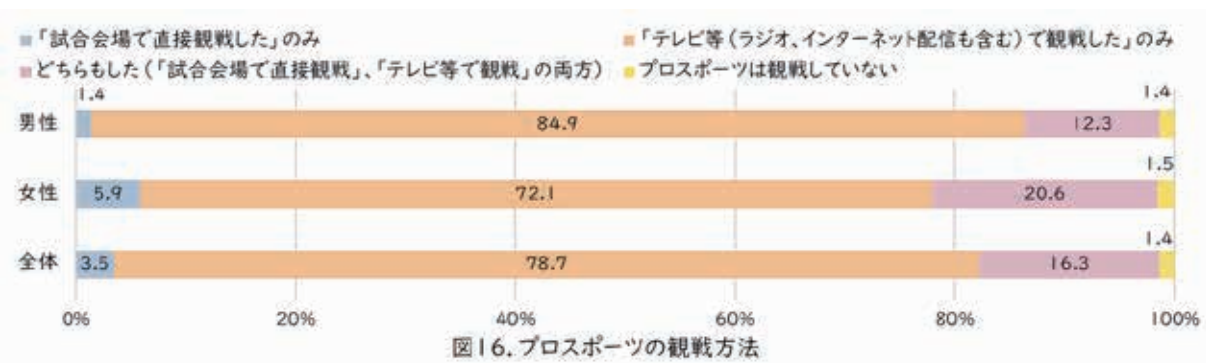
図14.参加したいスポーツ行事

3. 「みる」スポーツについて

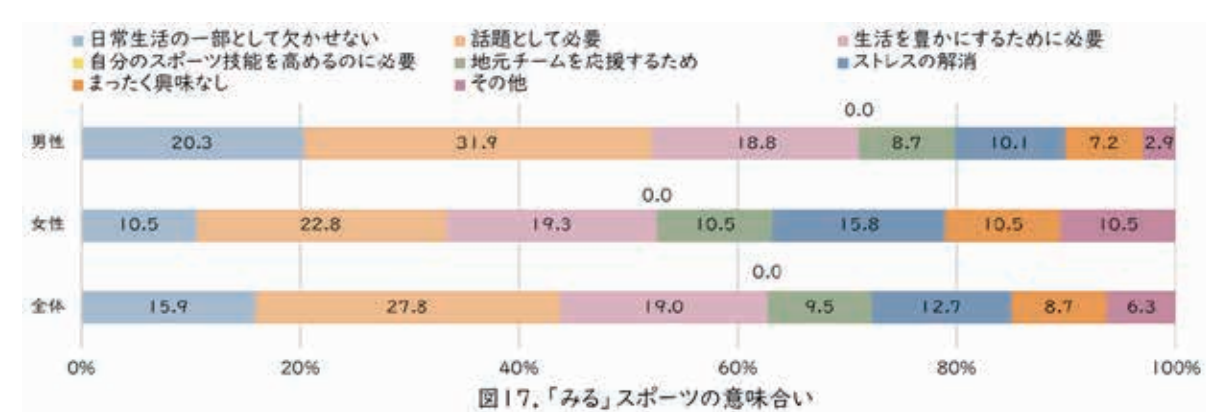
スポーツ観戦(テレビ観戦含む)の時間は、男性のほうが長い結果となった。特に、「週に1時間以上」の値が女性より男性の方が約2倍高くなっている(図15)。



過去1年間のプロスポーツ観戦方法について見てみると、ほぼ全員が観戦していることが分かった。そのうち、『「試合会場で直接観戦した」のみ』は僅かであるが、「どちらもした」を含めると約2割が直接観戦を経験している(図16)。



「みるスポーツ」の意味合いとしては、全体で「話題として必要」27.8%、「生活を豊かにするために必要」19.0%の順に割合が高い。男性で「日常生活の一部として欠かせない」が高い値を示していることから、生活の中でのコミュニケーションの一部となっている様子が伺える(図17)。



プロ・代表チーム等、トップレベルのチームや選手との交流について、「ある」と回答した割合は全体で12.0%という結果である(図18)。その交流内容については、「その他」を除いて、全体では、「競技の教室」が最も高い(図19)。

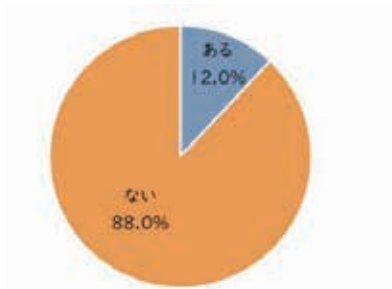


図18. トップレベルのチームや選手との交流

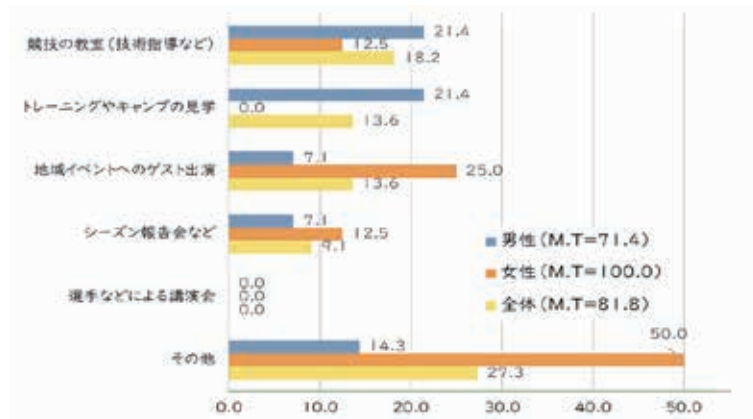


図19. 交流内容

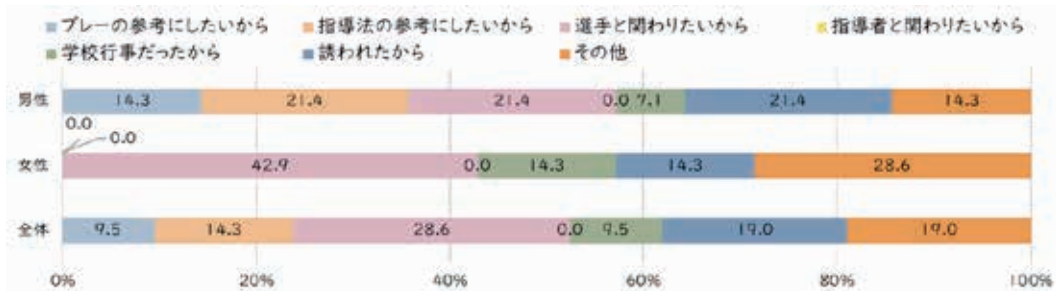


図20. 交流した理由

スポーツの合宿・キャンプ誘致については、「積極的に誘致すべき」が全体で5割を超えている（図21）。その主な理由として、「指導者と関わりたい」、「スポーツ実施者が増える」、「市の宣伝効果がある」の順で高い割合となっている（図22）。なお、「誘致する必要はない」の主な理由は、「興味がないから」となっている（図23）。

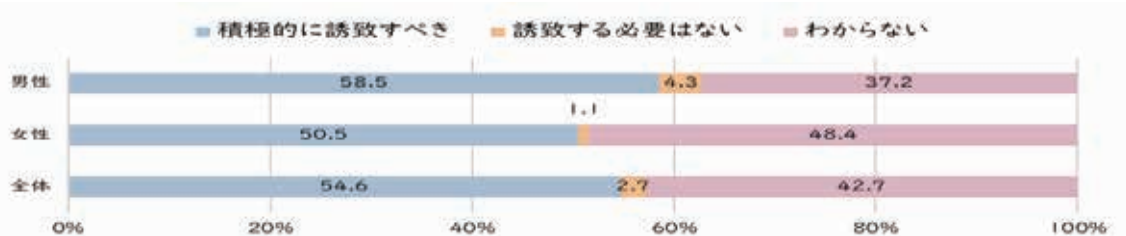


図21. キャンプ誘致の是非

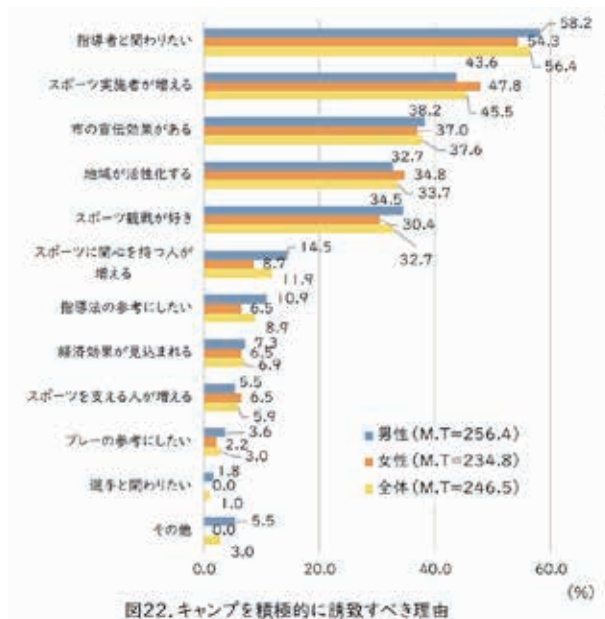


図22. キャンプを積極的に誘致すべき理由

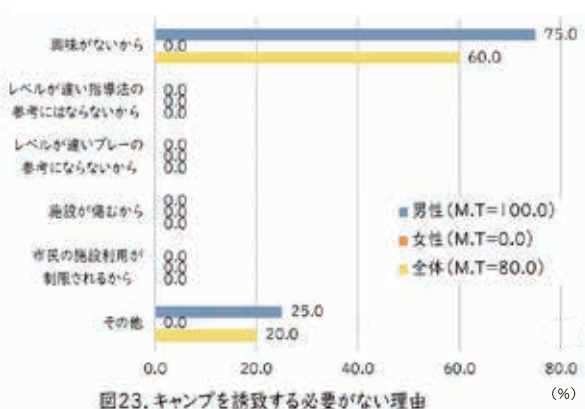
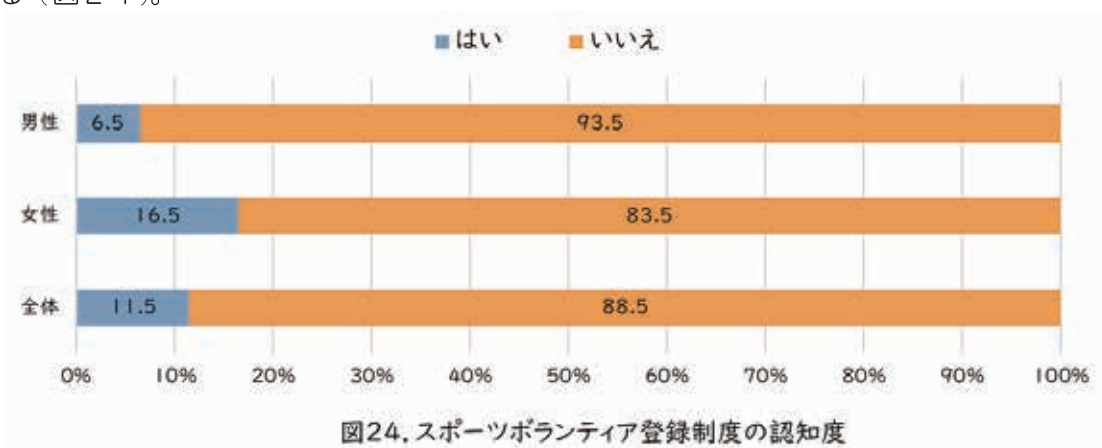


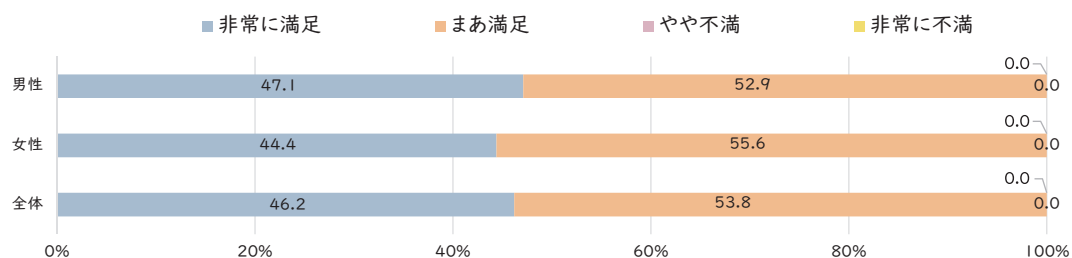
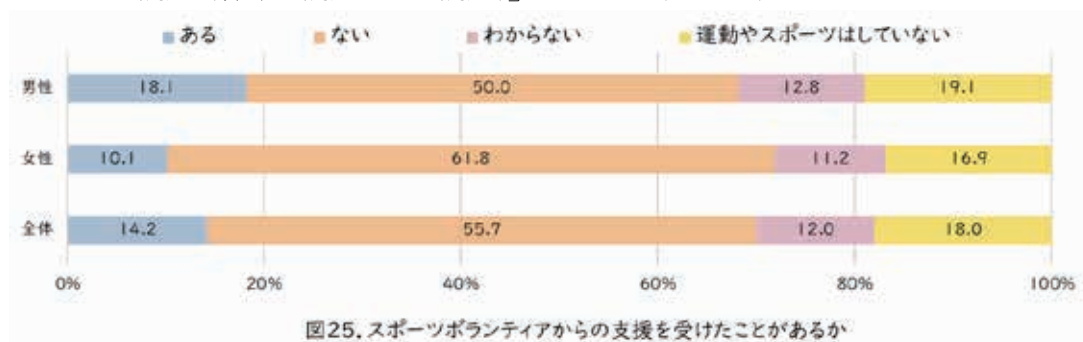
図23. キャンプを誘致する必要がない理由

4. 「支える」スポーツについて

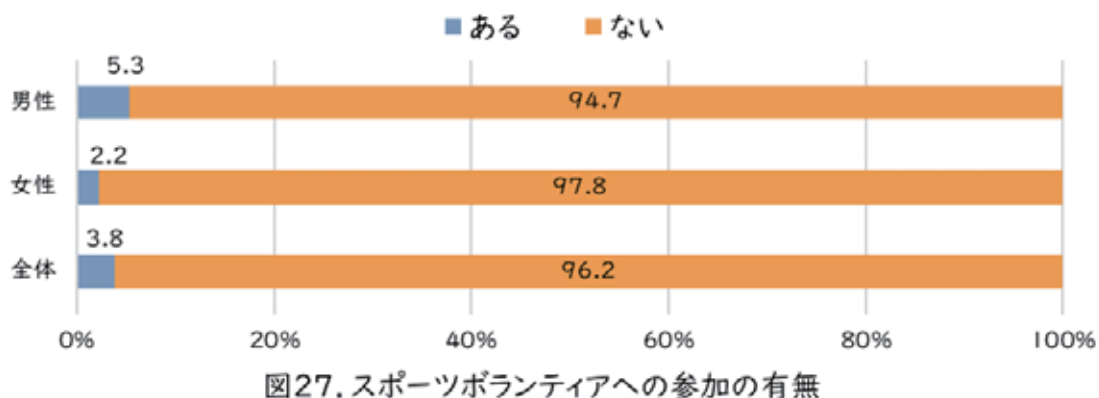
本市スポーツボランティア登録制度の認知度については、「知っている」が全体で11.5%となっている（図24）。



自分自身が、ボランティアから支援を受けたことがあるかについてたずねたところ、全体で14.2%が「ある」と回答し、前回調査より3.7%低い値となった（図25）。その際の満足度は、男女ともに100.0%「満足（非常に満足+まあ満足）」であった（図26）。



過去1年間におけるスポーツボランティア経験をみてみると、参加経験が「ある」人は全体で3.8%であり、前回調査の6.8%からほぼ半減している（図27）。



スポーツボランティアの参加の理由（経緯）は、女性は10割が「自ら応募して」、男性は6割が「スポーツ関係団体から頼まれて」という結果となり、男女で異なることが分かった（図28）。参加の感想としては、男女ともに「楽しかった」が最も多くなっている（図29）。

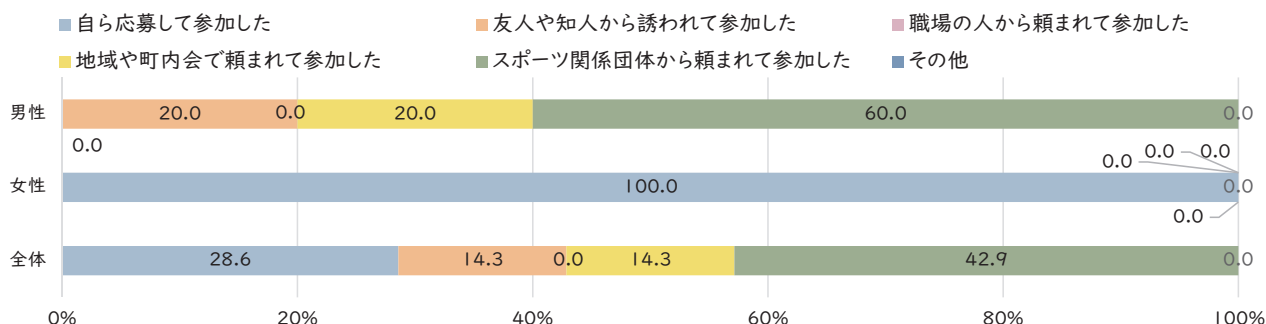


図28. スポーツボランティア参加の理由

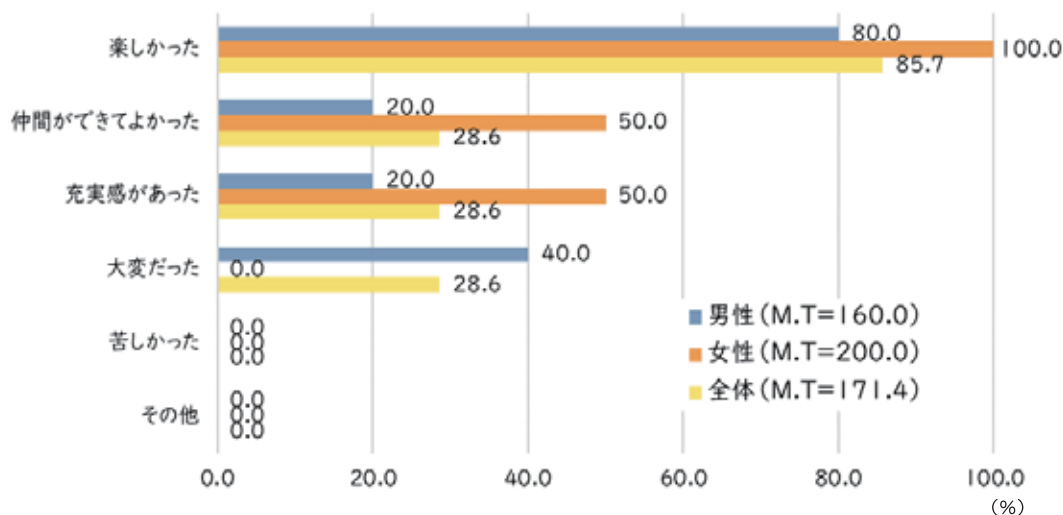


図29. スポーツボランティア参加の感想

スポーツボランティアに参加したことがない人を対象に、その理由を自由記述でたずねて回答をカテゴリー化した結果、「知らない」33.6%が最も高い割合を示し、次に「身体的理由」13.8%、「興味・関心がない」13.2%が続いている（図30）。

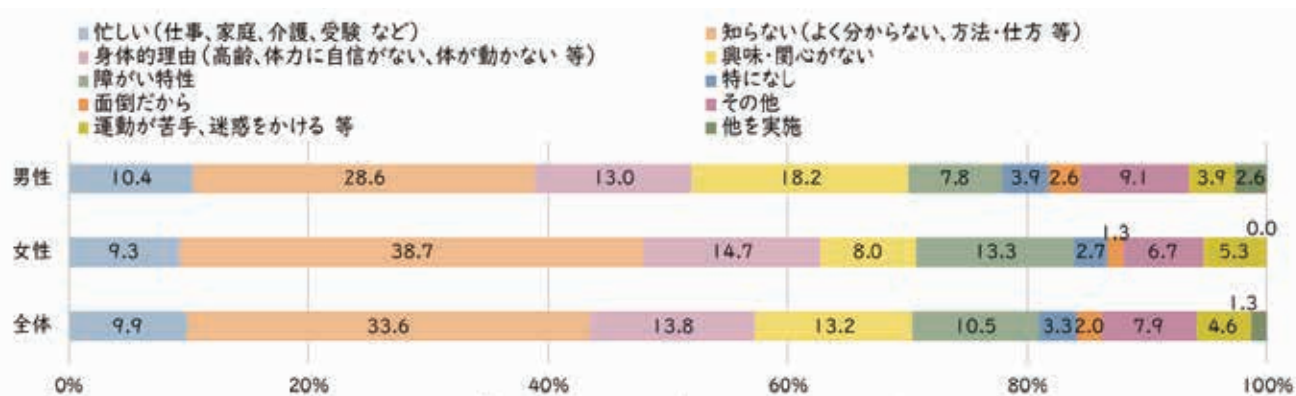
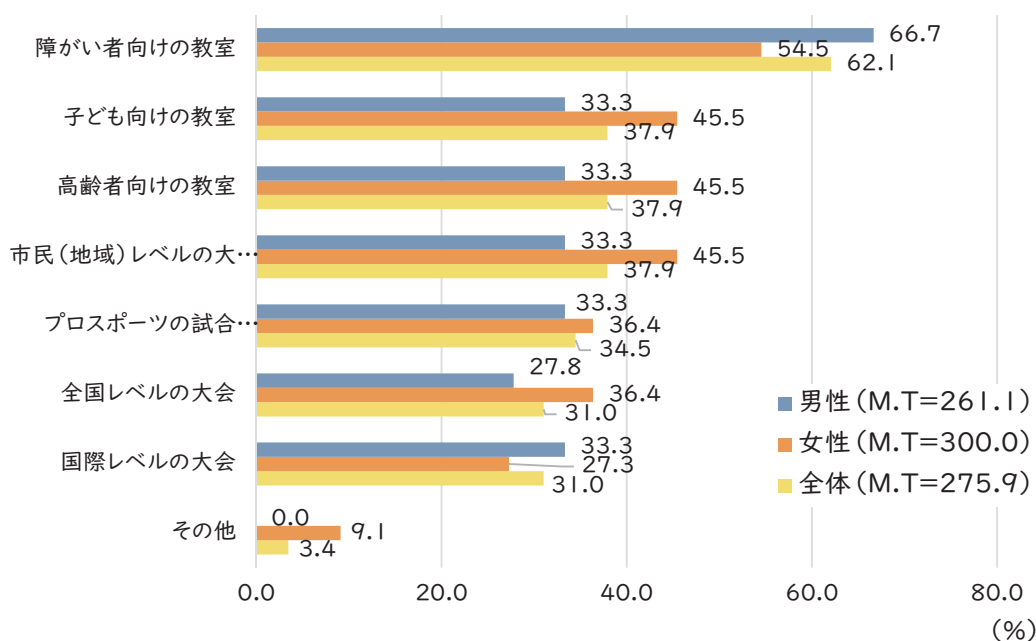
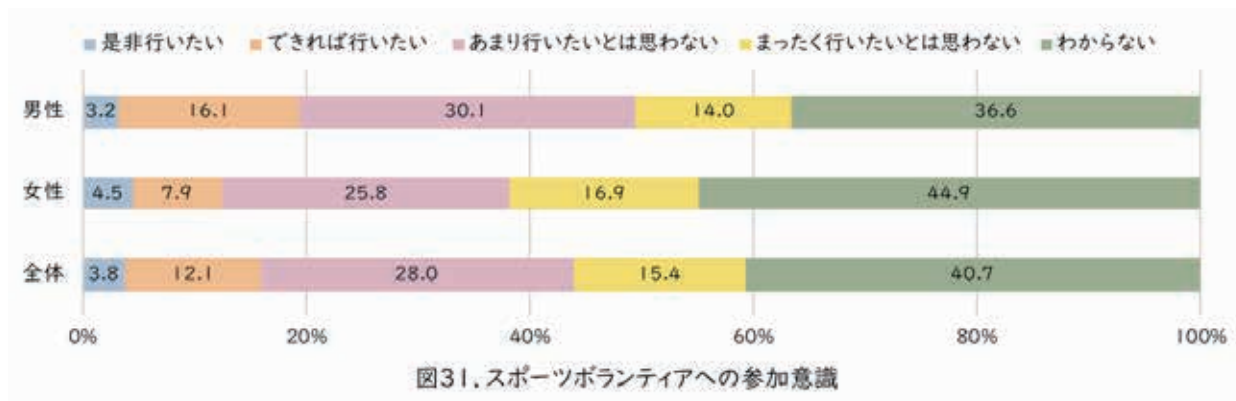


図30. スポーツボランティアへ参加したことがない理由

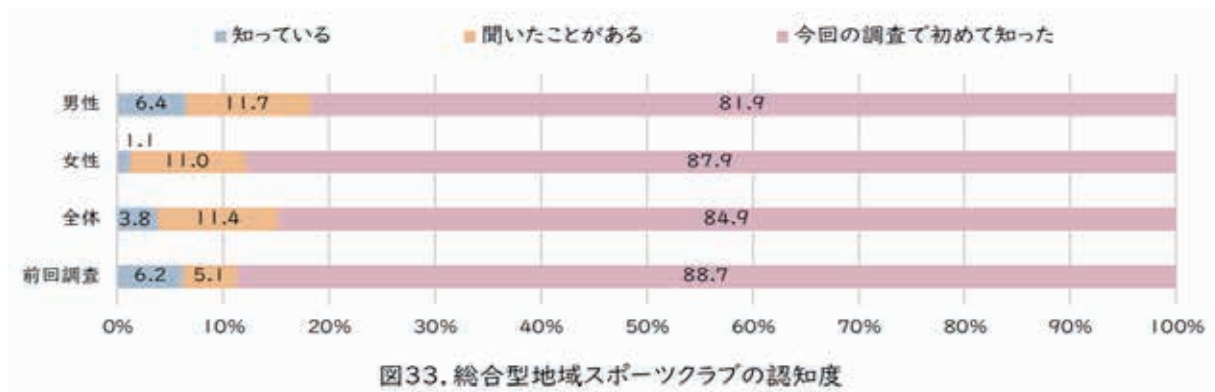
今後のスポーツボランティア活動への参加意識については、全体で「行きたい（是非行きたい+できれば行きたい）」と回答した人が15.9%を占め、前回調査の20.2%より低下している。さらに、「行きたいとは思わない（あまり行きたいとは思わない+まったく行きたいとは思わない）」は43.4%となっており、男性の方がより顕著な傾向を示している（図31）。

なお、「是非行きたい」「できれば行きたい」と回答した人のボランティア内容については、「障がい者向けの教室」が最も多く、その他の内容はほぼ同じ割合となっている（図32）。

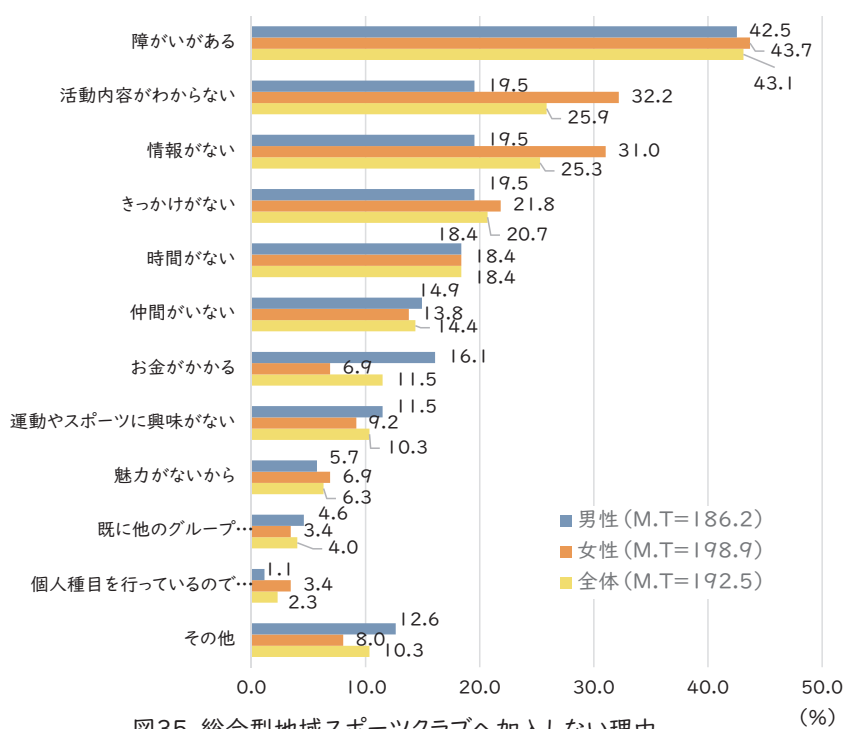
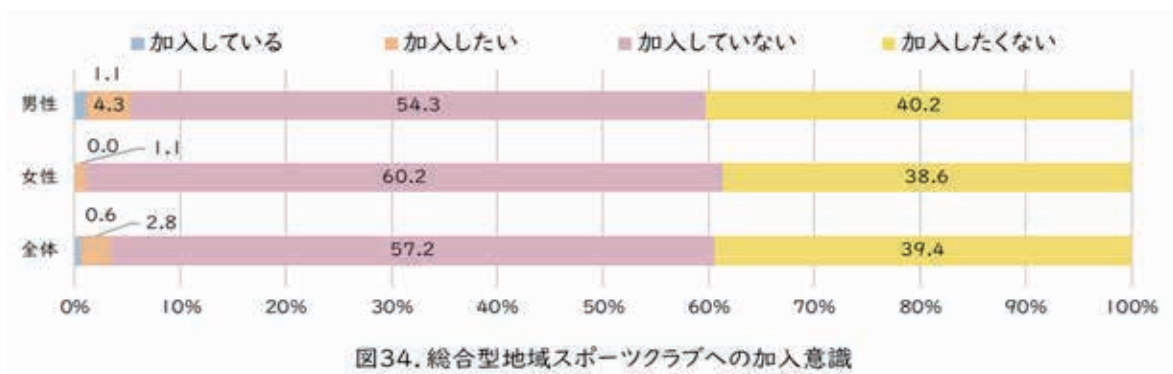


5. 総合型地域スポーツクラブについて

総合型地域スポーツクラブの認知度について、「知っている」人は全体で3.8%であり、前回調査の6.2%を下回る結果となったが、「聞いたことがある」11.4%で、前回調査5.1%を上回っており、認知度は高まってきている（図33）。



総合型地域スポーツクラブへの加入意思については、全体で「(既に)加入している」が0.6%、「加入したい」が2.8%と低い（図34）。それ以外の「加入していない」及び「加入したくない」人の理由については、前回調査と同様に全体で「障がいがある」が最も高い割合を占め、「活動内容がわからない」、「情報がない」、「きっかけがない」が続いている（図35）。



6. 施設について

学校体育施設の利用については、「利用したことがある」もしくは「空き状況を確認したことがある」と回答した人の割合が全体で17.2%を占めており、前回調査の9.6%を上回っている。全体の5割程度が、「今回の調査で初めて知った」と回答している（図36）。

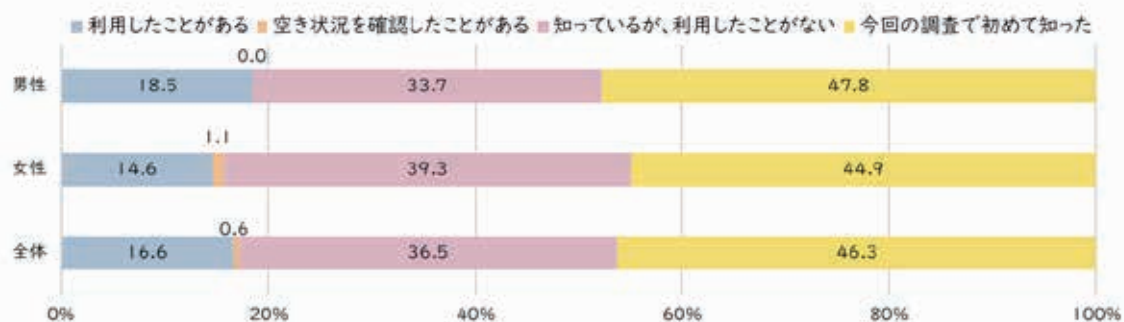


図36. 学校体育施設の利用

日頃、運動・スポーツを実施する場所としては、全体では割合の高い順に、「自宅・友人宅」、「公園・広場」、「道路や空き地」となっており、前回調査と同じであった（図37）。

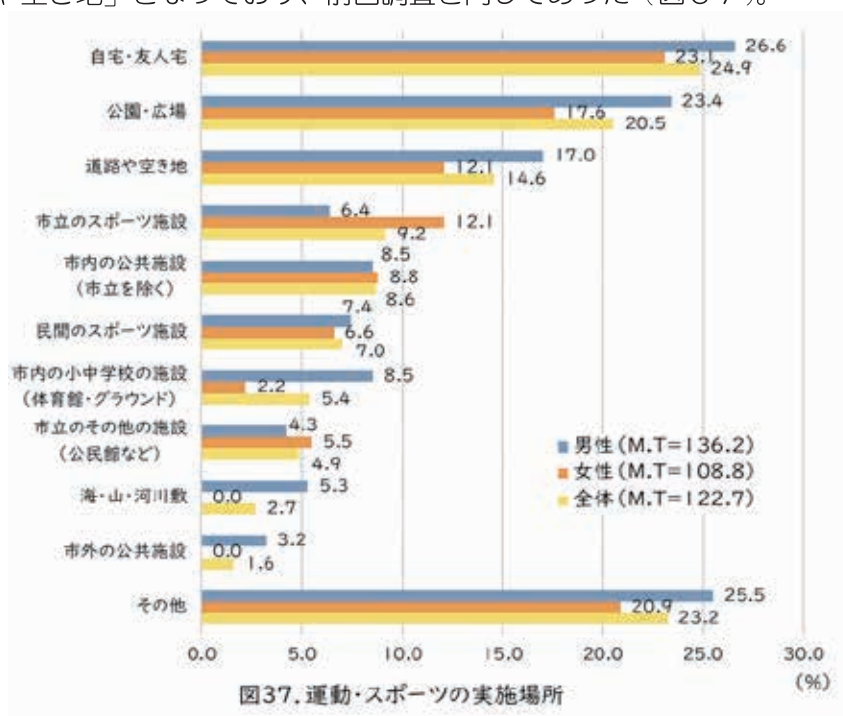


図37. 運動・スポーツの実施場所

運動やスポーツを実施する時間帯については、全体では前回調査と同様に「午前」が最も多く3割を超えている。また、午前以外では、男性は「夕方」、女性は「夜間」の割合がそれぞれ高くなっている（図38）。



図38. 運動・スポーツの実施時間帯(性別)

実施時間帯を年代別で見ると、10代以外の全体的傾向として、年代が高くなれば「早朝」と「午前」の時間帯の割合が増え、逆に年代が低くなれば「夜間」以降の時間帯が増えている（図39）。

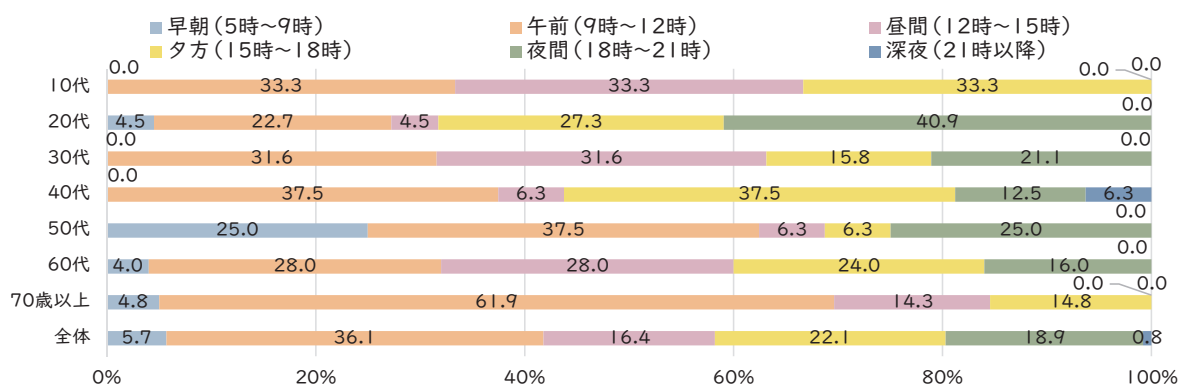


図39.運動・スポーツの実施時間帯（年代別）

実施場所までの移動手段は、全体で「自家用車、バイク」と「徒歩」の割合が多く、約3割ずつを占めている。なお、「送迎（家族による送迎+家族以外の人による送迎）」は17.0%と前回調査とほぼ同様であった（図40）。

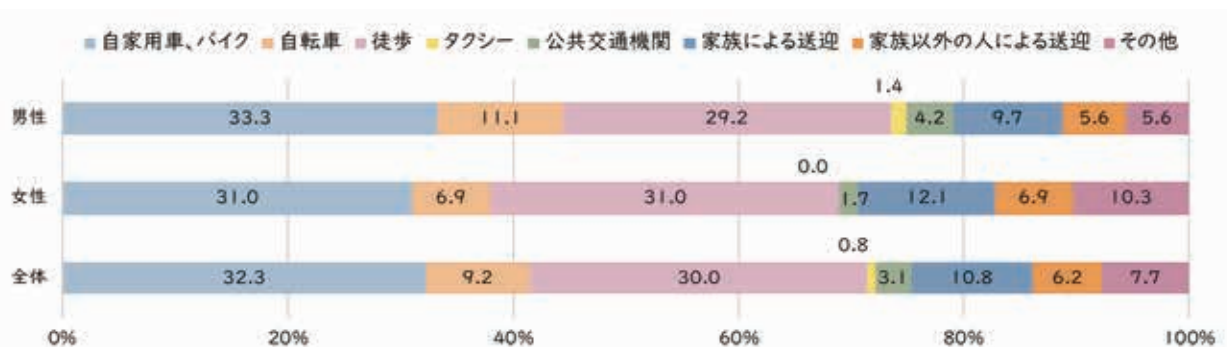


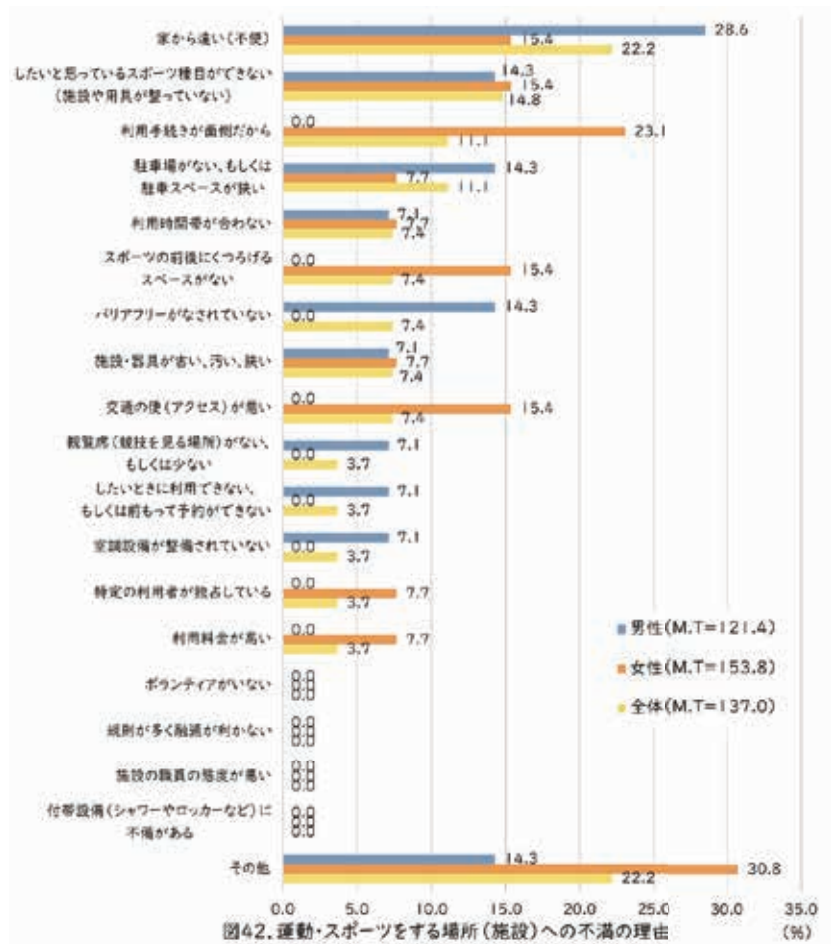
図40.運動・スポーツを実施する場所（施設）への移動手段

普段の運動やスポーツを実施している場所に対する満足度については、約8割の人が「満足（非常に満足+まあ満足）」と回答しており、「不満（やや不満+非常に不満）」の約2割を大きく上回っている（図41）。

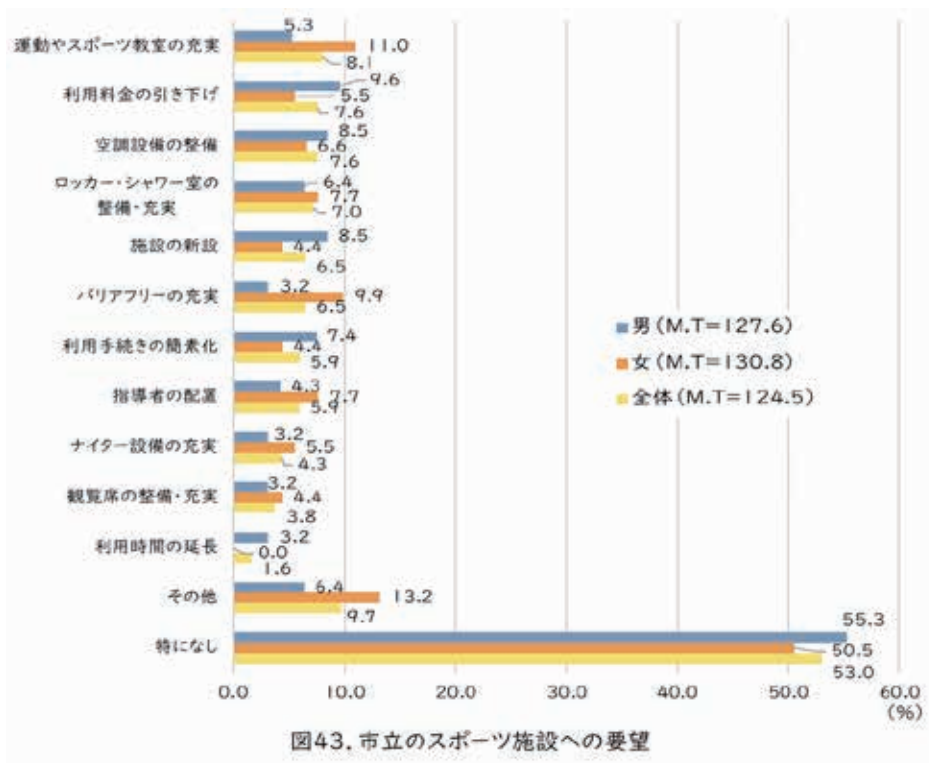


図41.運動・スポーツをする場所（施設）の満足度

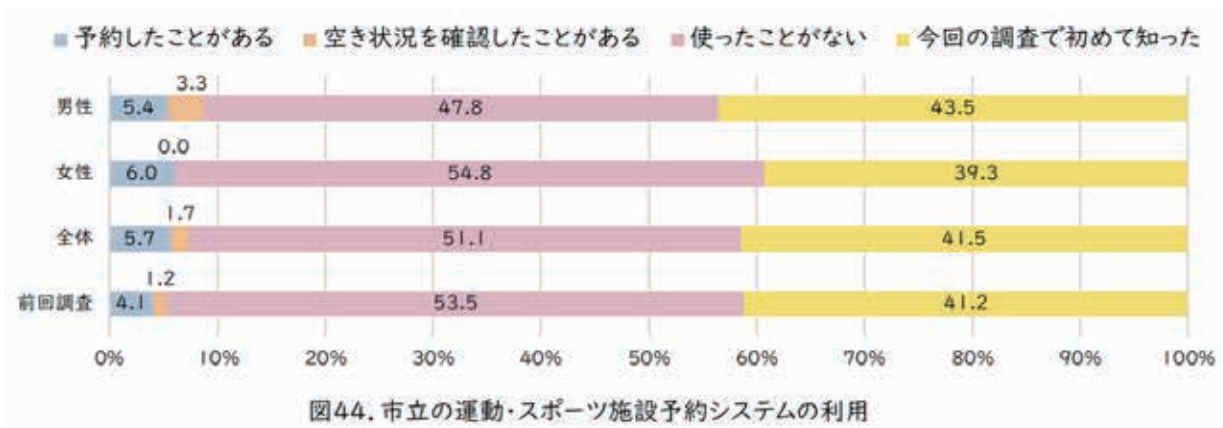
普段、運動やスポーツを行っている場所（施設）への不満の理由については、全体で「家から遠い」という立地に対する回答が最も多く、男性でも最も高い割合となっている。女性で最も高い割合を占めた理由は、「利用手続きが面倒だから」である。なお、「したいと思っているスポーツ種目ができない（施設や用具が整っていない）」が全体で2番目に高い割合を占めていることにも注視する必要がある（図42）。



市立のスポーツ施設に対する要望としては、約半数が「特になし」としている。全体では、「運動やスポーツ教室の充実」、「利用料金の引き下げ」、「空調設備の整備」の順で高い割合を示す結果となっている（図43）。



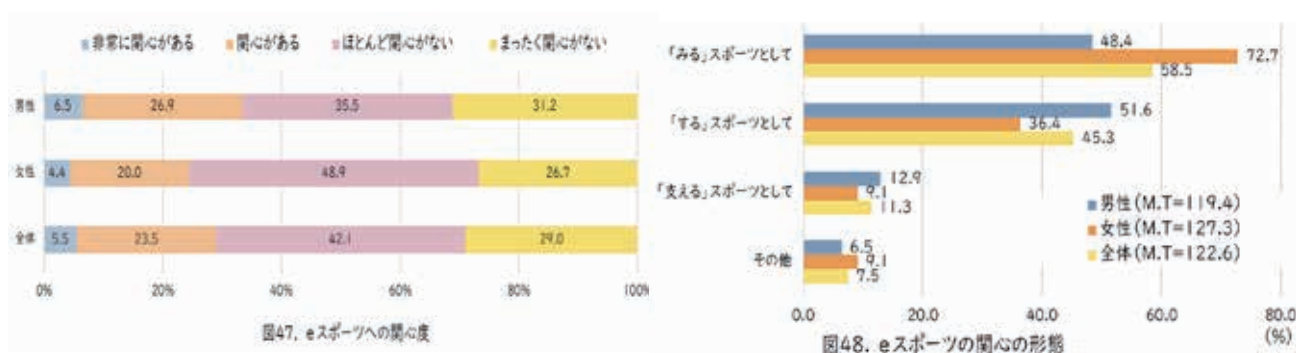
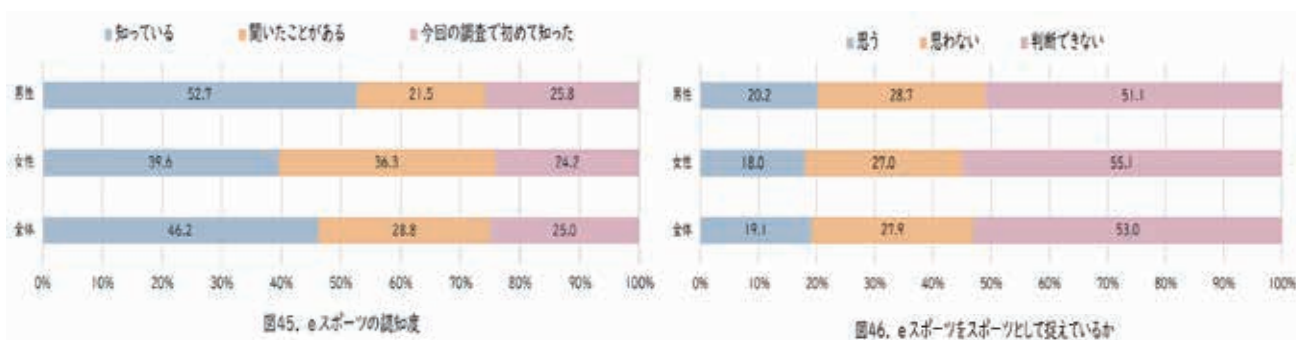
施設予約システムの利用については、「予約したことがある」と答えた人は全体で5.7%、「空き状況を確認したことがある」が1.7%と前回調査から僅かながら上回っている。なお、「今回の調査で初めて知った」の割合は約4割と横ばいとなっている（図44）。



7. その他

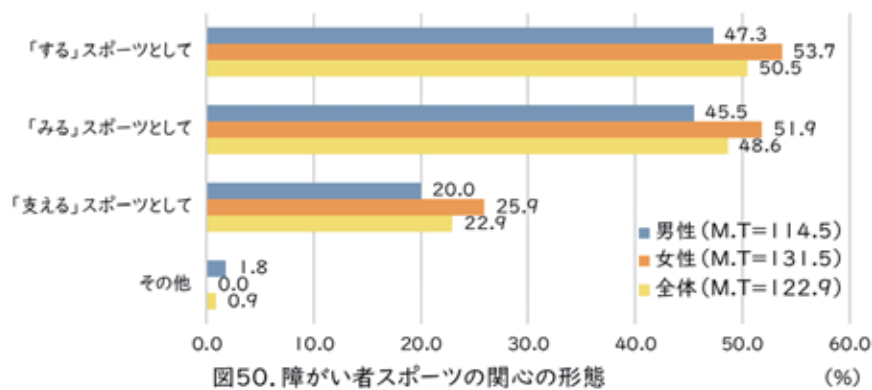
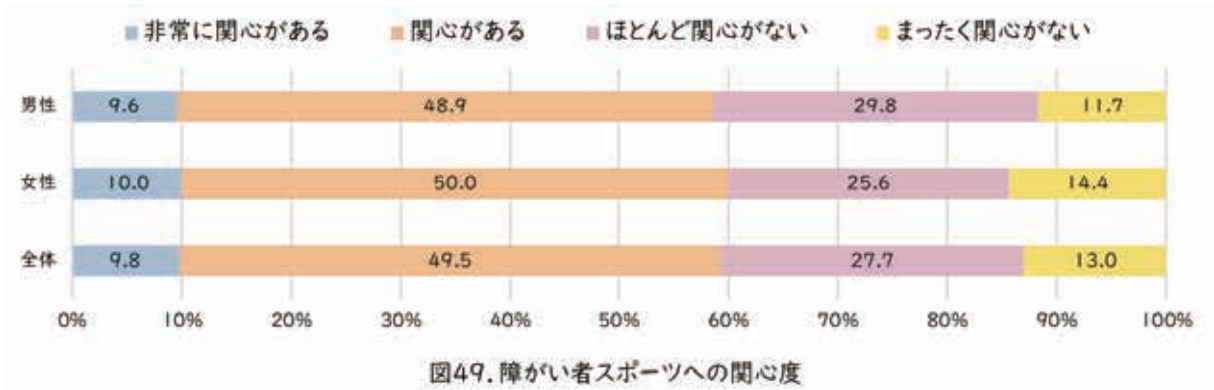
(1) eスポーツについて

「eスポーツ（エレクトロニック・スポーツ）」の認知度については、全体で約半数が「知っている」と回答している（図45）。そして、全体の19.1%がeスポーツを「スポーツ」として捉えている（図46）。関心度も全体の約3割が「関心がある（「非常に関心がある」を含む）」と回答している（図47）。関心の形態については、全体で「見る」スポーツとしてが最も高いが、女性は、「見る」スポーツ」、男性は、「する」スポーツで高い割合となっている（図48）。

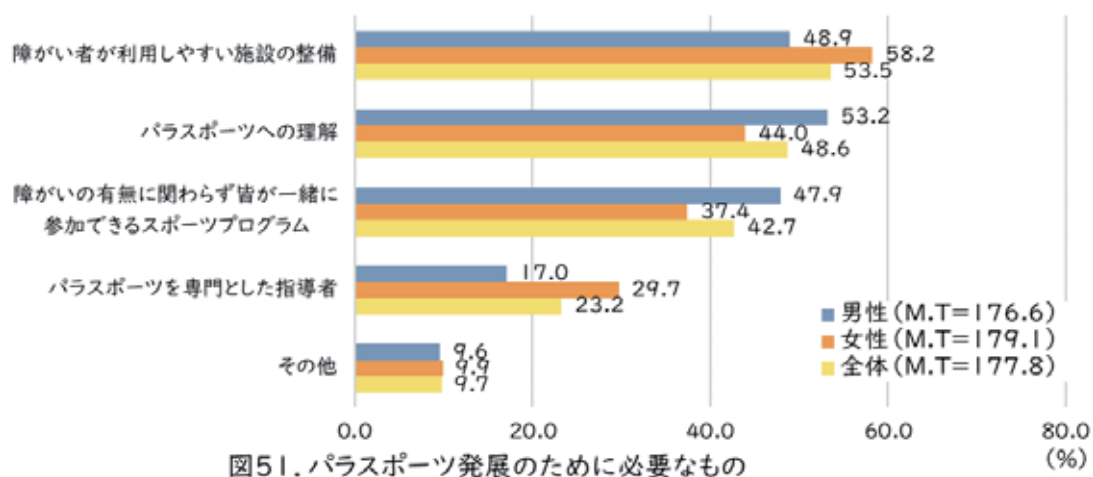


(2) 障がいのある人のスポーツについて

障がいのある人のスポーツについては、「関心がある(「非常に関心がある」を含む)」が全体で59.3%であり、前回調査の40.5%から約2割の上昇となっている(図49)。関心の形態については、前回調査時に全体で6割を超える値を示した『「みる」スポーツとして』が5割と低下しているものの、前回調査で4割であった『「する」スポーツとして』が1割増の5割を占める結果となっている。東京2020パラリンピック大会に続き、SAGA2024全障スポ大会の好影響と本市の取組が相俟つての結果とみることができる(図50)。



パラスポーツ発展のために必要なものについて複数回答でたずねたところ、「障がい者が利用しやすい施設の整備」が最も多く、次いで「パラスポーツへの理解」、「障がいの有無に関わらず皆が一緒に参加できるスポーツプログラム」の順となっている(図51)。



(3) 市のスポーツに関する情報の収集について

市のスポーツに関する情報収集手段として最も高い割合を示したものは全体で「テレビ」であり、「市報」、「新聞・雑誌」が続いている。性別比較でも同じ順位となっている（図52）。

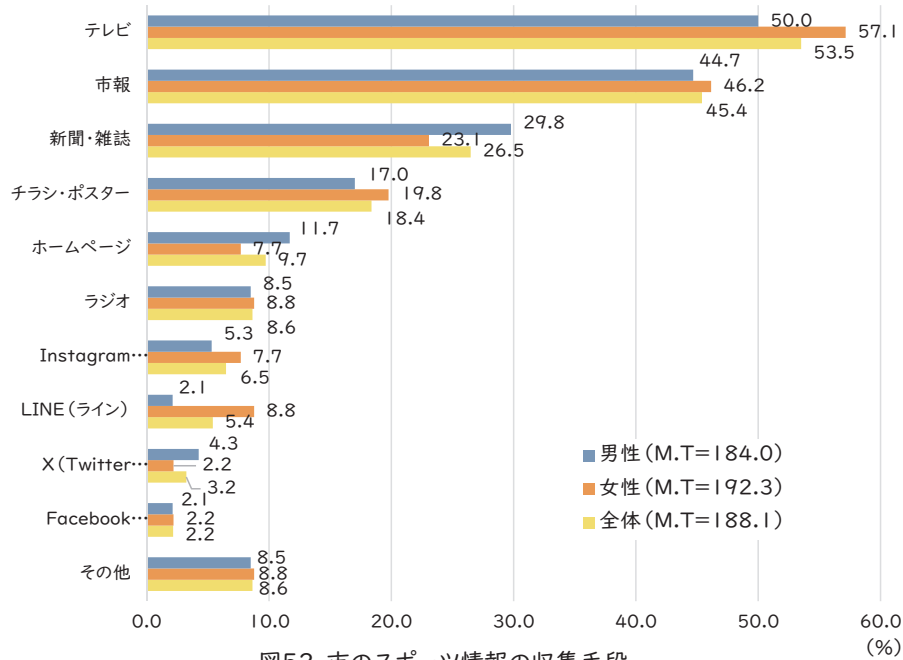


図52. 市のスポーツ情報の収集手段

(4) スポーツ競技力向上のために重要なことについて

本市の選手・チームの競技力向上のために最も大事なことについてたずねた結果、最も選択が多かった上位2項目は、全体と性別比較も同様に「ジュニアアスリート発掘・育成事業の充実」、次いで「練習場所となる競技施設の確保」であった（図53）。

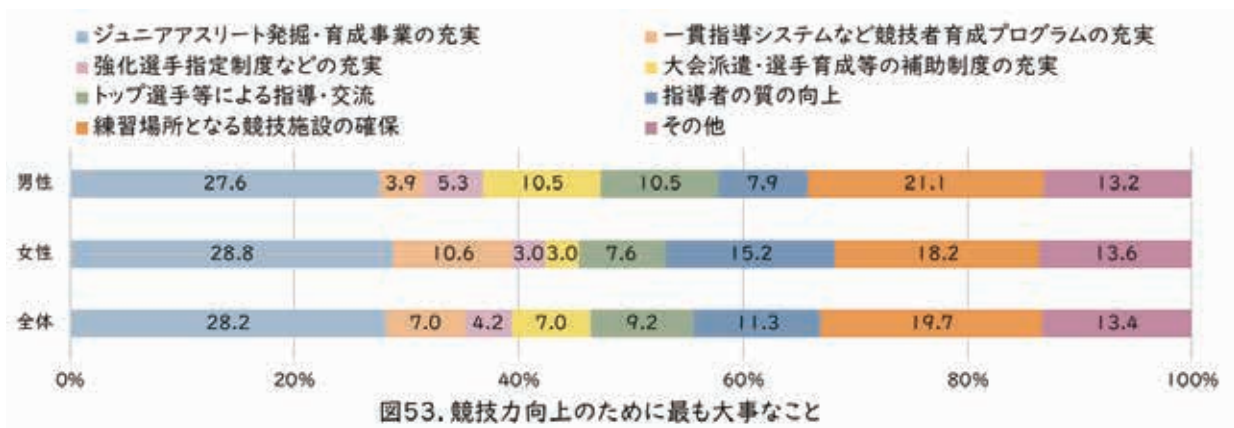


図53. 競技力向上のために最も大事なこと

(5) アーバンスポーツ実施に向けた整備取組について

オリンピックの正式種目にも採用され、子どもや若者に人気が高い「アーバンスポーツ」に対する本市の実施場所の整備については、約半数が「賛成」を示し「反対」は僅かである（図54）。

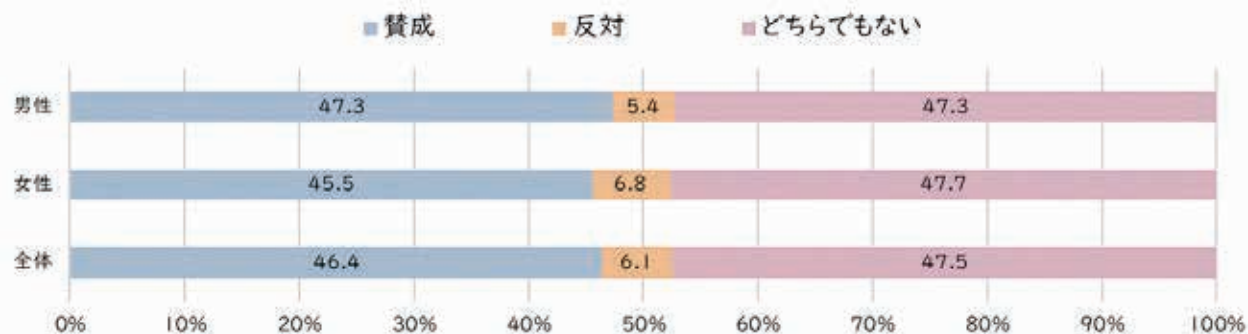


図54. アーバンスポーツ実施への取り組み

(6) 学校運動部活動地域展開へのあり方について

国の取組の一つである「学校部活動の地域展開」に関連して、本市の運動部活動の地域展開のあり方の理想についてたずねた結果、「専門的で丁寧な指導が受けられる」43.2%、「いろんな世代や年齢の人と一緒に活動ができる」32.4%、「やりたい種目を選択できる」28.1%が上位3項目として挙げられた（図55）。

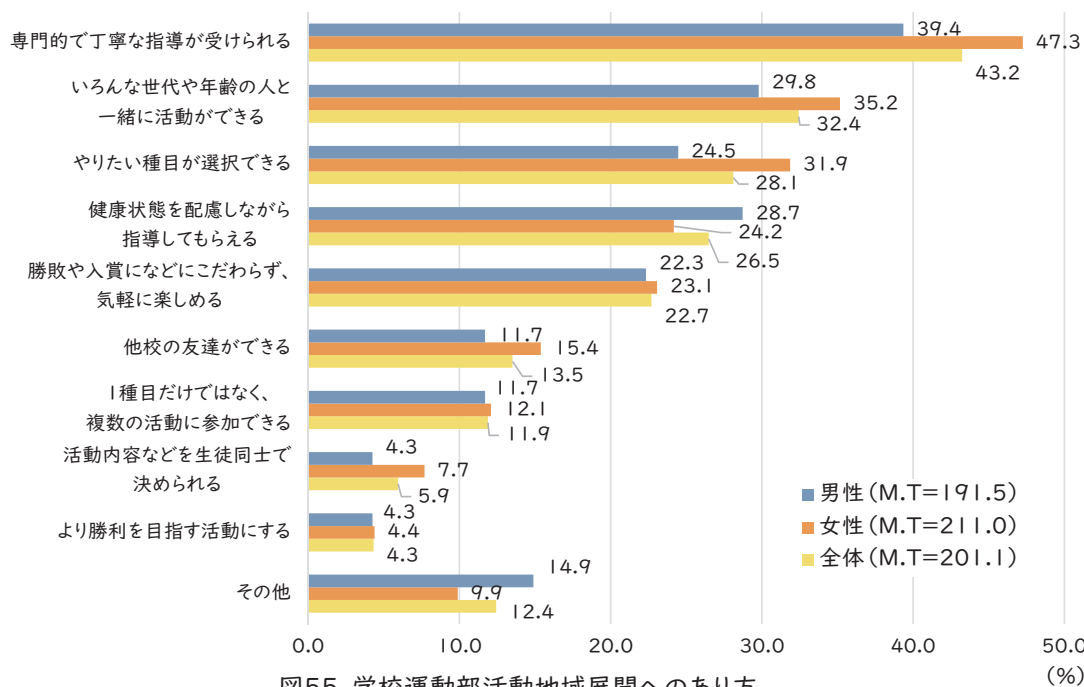


図55. 学校運動部活動地域展開へのあり方

【自由意見】佐賀市のスポーツ振興についてのご意見（一部抜粋）※文面は記載のまま掲載

「みんなが同じように」ではなく、多種多様が色んな世界や可能性を生み出しやすいと思います。	女性	50代
アリーナは夜遅くまでであると、帰りのバスがない。中極経由小城行は20時台までしかない。車を停めるところもないし、行きづらくなった。	女性	40代
運動することは楽しいです。人との交流もあり、けど、そこまで行きつくことは少し大変です。転勤してくる人は、そこまで行くのに時間がかかります。だれかが声かけてくれればいいのですが。他の県から来た人の意見をきいて、それを取り入れないと、流動的な考えはむずかしいと思います。その県や市だけのあんもくの方法があるみたいで。けど、がんばって下さい。	女性	40代
運動はすごく好きですが、外出をするのが苦手で交友関係がうまくいきません。	男性	40代
外国人選手や観戦者も増えているので、そこに対応できる人、関係者、プロモーションの充実があるといいと思う。	女性	30代
健康運動センターの大人料金が高いので頻繁には行けない。健康運動センターのトレーニングルームは中学生が使えないのは不便。（大人同伴ならOKにしてほしい）	女性	10代
公園でキャッチボールができるようにして欲しい。今はできない所が増えた為、子供が子供らしく遊べる環境作りを。	男性	20代
シニアが興味を持つ様々なイベントの数をもっと増やしてください。	男性	70代
重度障がい者（児）は自分での移動はできません。必ず家族か支援者が必要になります。会場まで行くことだけではなく、会場内でも不安などがあり、動けなくなることも多くあります。だれでもが楽しく活動できるスポーツをするのはとてもありがたいので、安全・安心に参加できるプログラムをぜひ作ってほしいと思います。（家族の負担が多すぎる）	男性	20代
小・中・高校生の皆さんには勉強だけではなくスポーツを通して何かを学んでほしい。そのためには幼少の時期にスポーツにかかわり将来の基盤を体験してもらいたい。	女性	40代
障害者も競技場で練習をもっとさせて欲しい環境を作ってほしい。	男性	50代
障がいの有無、年齢、性別に関わらず、いつでも気軽に楽しめるスポーツ・場所があると嬉しいです。	女性	50代
人口が少なく良い指導者がいない。財政もゆとりがない。無理せず、何かの才能がある人がつぶれない程度に余力がかりでない位が持続しやすいと思う。バスが早朝夜間が足りないのが難しい。無人の研究など色々して車がなくても移動に困らないようにしてほしい。それがないと運動に行きつけない。	女性	40代
スポーツができる事はいい事です。私は軽い運動しかできないので、ウォーキングや家でのヨガやラジオ体操をして体力をつけています。障がいのある方が少しずつスポーツに取り組んでいけるといいです。	女性	30代
スポーツは社会全体や個人の人生を豊かにすると思います。これからもスポーツ振興に力を注いでいただきたいです。	男性	50代
だれでも気軽に出来るスポーツをふやしてほしい。	女性	70代
もっと人材育成に力を入れ後継者を育てることが必要である。また広報をもっと行い、市民に知ってもらうようにする。	男性	60代
良い人材、優れている選手を県内で選出して育てる。	男性	60代

IV. まとめ

ここでは「する」「みる」「ささえる」スポーツの視点を中心に、前回調査及び今回の全体調査の結果と比較する形でまとめることとする。

1. 「する」スポーツ

普段の運動不足感について、「感じる」と回答した人は約8割となった（図7）。次に、日常的（週に1日以上）に運動やスポーツを行っている人（以下、定期的実施者）の割合を見ると、全体で41.9%を示し前回調査の39.3%を2.6%上回った（図8）。一方、スポーツや運動を「まったく行わなかった」人（以下、未実施者）の割合が前回調査とほぼ同じ4割を占めていることから、定期的実施者と未実施者の二極化に陥らない未実施者への有効な取組が必要になる。

未実施者の理由については、全体で最も高い割合を示した「病気やけがをしている」（図12）で象徴されるように、当事者のこれまでの経験などを踏まえ自身の心身の状態では運動やスポーツは無理という意識を持っていることが予想されるため、障がいがあっても（誰もが）楽しめる運動やスポーツを体験できる機会を多く提供していく取組の継続的展開が求められる。

2. 「みる」スポーツ

テレビ視聴を含めたスポーツ観戦は約37%が「週に1時間以上」行っており、前回調査より約3%伸びている（図15）。プロスポーツの直接観戦は約20%が経験している（図16）。日常生活との関係については、「話題として必要」、「生活を豊かにするために必要」としていることから、生活の中でのコミュニケーションの一部となっている様子が伺える。なお、「ストレス解消」の割合が高いことが特徴としてあげられ、SAGA2024国スポ・全障スポの開催を通じて、「みる」ことを契機に、「する」スポーツへのスムーズな移行が可能となる対策が必要となるだろう。

3. 「ささえる」スポーツ

スポーツに対する意識が高まっていることから、スポーツ推進委員等をはじめ、総合型地域スポーツクラブの関係者等の地域スポーツ活動を支える立場の人々を対象に、障がいのある人及びパラスポーツに対する理解を深め、運動・スポーツ活動を支援・指導していくことにつながる研修会などを継続的に行っていくことが重要となる。

運動やスポーツ時にボランティアから支援を受けた経験のある人は、全体で14.2%であり、前回調査を3.7%下回った（図25）、その際のボランティア支援に対する満足度に不満はなく、前回調査から改善されている様子が明らかとなった（図26）。

4. その他

アーバンスポーツ実施に向けた整備取組については約半数が賛成している（図54）。

障がいのある市民の運動・スポーツ実施場所は、「自宅・友人宅」を含め身近な場所であり、市立のスポーツ施設利用率が約1割となっている（図37）。市立のスポーツ施設に対する要望は、「特にない」が約5割を占めたが、運動やスポーツ教室の充実を求める声などがあつた（図43）。また、パラスポーツ発展のために必要なものに対する回答においても、「障がい者が利用しやすい施設の整備」が5割を超え最も高い割合を示した（図51）。

本市の『スポーツ競技力向上のために重要なこと』(図53)については、「ジュニアアスリート発掘・育成事業の充実」が最も高く、『学校運動部活動の地域移行へのあり方』(図55)では「専門的で丁寧な指導が受けられる」の項目が最も多くなっている。

障がいのある人のスポーツについての関心度が6割を示し、前回調査より2割増加している(図49)。関心の形態については、「する」スポーツが前回調査より1割増加の5割となり、前回調査で1位であった「みる」スポーツを僅かに上回っている(図50)。

この結果は、障がいのある人のスポーツについて、東京2020パラリンピック大会やSAGA2024全障スポ大会の開催を契機に、スポーツへの関心が高まったことが考えられ、地域の身近な場所で、スポーツが実施できるような環境づくり、きっかけづくりが必要であると考えられる。

第3次佐賀市スポーツ推進計画策定までの経過

期 日	会 議 等	会議内容等
令和5年11月8日	第1回審議会	・スポーツ推進計画策定について ・計画策定までの進め方について ・アンケート調査について
令和5年11月28日	第2回審議会	・アンケート内容について
令和5年12月19日 ～令和6年1月19日	障がい者アンケート実施	・佐賀市民のスポーツに対する意識と活動の実態に関する調査【障がい者対象】の実施
令和5年12月28日 ～令和6年1月19日	市民アンケート実施	・佐賀市民のスポーツに対する意識と活動の実態に関する調査の実施
令和6年3月26日	第3回審議会	・諮問 ・アンケート調査結果について ・基本方針等案について
令和6年5月28日	第4回審議会	・基本施策について ・課題整理について
令和6年7月8日	第5回審議会	・課題整理について
令和6年8月5日	第6回審議会	・課題解決に向けた具体的施策について ・課題解決に向けた具体的取組について
令和6年9月30日	第7回審議会	・スポーツ推進計画素案について
令和6年10月29日	第8回審議会	・スポーツ推進計画素案について
令和6年11月12日	教育委員研修会	・第3次計画案の説明 ・パブリックコメント実施の説明
令和6年12月13日	議会総務委員研究会	・第3次計画案の報告 ・パブリックコメント実施の説明
令和6年12月23日 ～令和7年1月24日	パブリックコメントによる 意見募集	・市報、ホームページ、行政資料コーナー、 公民館等での閲覧配布
令和7年2月25日	定例教育委員会	・パブリックコメント報告 ・第3次計画案についての意見の聴取
令和7年2月26日	第9回審議会	・第3次計画の審議会答申案の確認
令和7年2月26日	審議会答申	・市長へ「第3次佐賀市スポーツ推進計画について」答申
令和7年3月	・第3次佐賀市スポーツ推進計画策定	

佐賀市スポーツ推進審議会委員名簿

任期：令和6年8月1日～令和8年7月31日

	区 分	所 属 等	氏 名	前委員氏名
1	学識経験者	公益財団法人佐賀市スポーツ協会 会長	林 正博	
2	"	佐賀市スポーツ推進委員協議会 副会長	江口 春代	中島 祥子
3	"	赤松スポーツクラブ・シャチ 会長	徳光 清孝	
4	"	佐賀市立大和中学校 校長	堤 孝二	
5	"	佐賀市太極拳協会 会長	吉永 美紀	
6	"	佐賀市スポーツ少年団 本部長	伊東 健児	
7	"	国立大学法人佐賀大学 教育学部 准教授	町田 正直	
8	"	学校法人永原学園西九州大学 健康福祉学部 教授	山田 力也	
9	"	佐賀市レクリエーション協会 会長	井手 一雄	
10	"	佐賀市鍋島公民館 館長	岸川 いづみ	西川副公民館 館長 田中 夏美
11	"	佐賀県障がい者スポーツ指導者協議会 副会長	嘉村 英哲	
12	"	佐賀市老人クラブ連合会 理事	時尾 久美子	
13	関係行政機関	佐賀県スポーツ課長	森岡 貴之	
14	公 募	公募委員	野中 将司	
15	"	公募委員		元安 陽一
16	"	公募委員		松本 昌代